

原 著

肺結核ニ微量ノ特種異種細菌ヲ應用シタル 最近ノ臨牀的經驗例報告

駿河臺 額田内科病院研究室(院長 額田晉)

額 田 晉
龍 智 恵 子
吉 井 田 鶴 子

余等ガ何故ニ極メテ微量ノ特種異種細菌ヲ肺結核治療ノ目的ニ應用スル事ヲ試ミタルカ、其理由竝ビニ實驗の根據ハ如何ト云フニ、額田及ビ其共同研究者ニヨリテ從來ノ文獻ニ記載ナキ次ノ如キ新タナル事實ヲ見出シタルニ因ル。即チ(第一)一般ニ異種細菌ハ各種ノ病原ニ對スル生體ノ抵抗力ニ影響ヲ與フルモノニシテ、特種ノ異種細菌ハ生體ノ抵抗力ヲ増強セシムル作用アルコト、(第二)或ル病原菌ニ對スル生體ノ抵抗力ヲ増進セシムル作用アル特種異種細菌ノ微量ハ、當該病原菌ニヨル發熱ヲ抑制又ハ下降セシムル作用アル事、(第三)結核菌ノ致死の傳染ニ對スル生體ノ抵抗力ヲ増進セシムル特種異種細菌ノ微量ハ、實驗的の血行性結核ノ經過ニ對シテ著シク良好ナル作用ヲ呈スル事、之デアル。今順序トシテ先ヅ其概要ヲ略述ス可シ。

余等ガ何故ニ極メテ微量ノ特種異種細菌ヲ肺結核治療ノ目的ニ應用スル事ヲ試ミタルカ、其理由竝ビニ實驗の根據ハ如何ト云フニ、額田及ビ其共同研究者ニヨリテ從來ノ文獻ニ記載ナキ次ノ如キ新タナル事實ヲ見出シタルニ因ル。即チ(第一)一般ニ異種細菌ハ各種ノ病原ニ對スル生體ノ抵抗力ニ影響ヲ與フルモノニシテ、特種ノ異種細菌ハ生體ノ抵抗力ヲ増強セシムル作用アルコト、(第二)或ル病原菌ニ對スル生體ノ抵抗力ヲ増進セシムル作用アル特種異種細菌ノ微量ハ、當該病原菌ニヨル發熱ヲ抑制又ハ下降セシムル作用アル事、(第三)結核菌ノ致死の傳染ニ對スル生體ノ抵抗力ヲ増進セシムル特種異種細菌ノ微量ハ、實驗的の血行性結核ノ經過ニ對シテ著シク良好ナル作用ヲ呈スル事、之デアル。今順序トシテ先ヅ其概要ヲ略述ス可シ。

第一、生體ノ抵抗力ニ及ボス各種異種細菌ノ影響

異種細菌ノ非經口の應用ハ從來一般ニ所謂非特異性療法又ハ蛋白體療法ナル概念ノ下ニ總括セラル。サレド繾ツテ考フルニ、各種ノ細菌ハ夫夫固有ノ構造ヲ有シ其物理化學的の性状ヲ異ニスルヲ以テ、果シテ各種異種細菌ノ非經口の應用ニ際シテ現ハル、作用ハ、單ニ蛋白質ニ共通ナル非特異性作用ノミニ歸スベキモノナリヤ否ヤ頗ル疑問ナリトセザルヲ得ズ。而シテ額田⁽⁴⁾ハ今ヨリ13年前嘗ツテ永續の後天性免疫ノ際ニ於ケル體內組織ノ病原菌ニ對スル抵抗力ノ變化ニ關スル實驗的研究ニ從事セシ當時、各種ノ異種細菌ハ恐ラク各種病原ニ對スル生體ノ抵抗力ニ影響ヲ與フルモノナラントノ想像ヲ抱クニ充

分ナル根據ヲ得、爾來共同研究者(賀古⁽²⁾⁽³⁾、有福⁽⁴⁾、吉井⁽⁵⁾、大槻⁽⁶⁾、藤井⁽⁷⁾、奥谷⁽⁸⁾⁽⁹⁾、龍⁽¹⁰⁾)ノ助力ニヨリ生體ノ抵抗力ニ及ボス各種異種細菌ノ影響ニ就テ系統的ニ實驗的研究ヲ遂行セリ。今其成績ヲ總括スレバ第1表ノ如シ。抵抗力検査ノ實驗ニ際シ、前處置一用ヒタル異種細菌ハスベテ死菌ニシテ、恰モ通常ノ免疫ノ場合ニ於ケルガ如ク、數日ノ間隔ヲ置キテ3回皮下注射シ、抵抗力検査ノ方法トシテハ多クハ最後ノ注射後10日目ニ病原菌ヲ注入シテ致死の傳染ヲ起スカ又ハ「トキシン」ノ致死量ヲ注射シテ、注射後死ニ至ルマデノ時間ヲ觀察セリ。而シテ各實驗ニ當リテハ表ニ記載セル如ク多數

第1表 生體ノ抵抗力ニ及ボス各種異種細菌ノ影響一覽表

抵抗力ノ検査ニ用 ヒタル「トキシ ン」又ハ病 原菌ノ種 前處置ニ 用ヒタル 異種細菌ノ種類	「デフ テリ トキシ ン」	肺炎 雙球 菌(生 菌)	「チ フス」 菌(生 菌)	連鎖 狀球 菌(生 菌)	大腸 菌 (生 菌)	赤痢 (志賀 菌)(生 菌)	「パ ラチ フス」 (生菌 B菌)	結 核 菌 (生 菌)
淋菌	+++	+	±	—	±	—	±	+++
連鎖狀球菌	---	+	—	—	—	—	±	—
百日咳菌	+++	++	±	±	+	+++	±	---
赤痢菌	—	+	+	—	—	—	++	+
「コレラ」菌	—	+	++	+	±	±	++	---
「ヘスト」菌	—	+	+++	---	+	±	++	++
大腸菌	±	±	+	+++	—	+	+	---
「パラチフス」A菌	—	±	++	±	+	+	+++	+
「パラチフス」B菌	---	±	++	±	+	±	—	+
「チフス」菌	—	—	—	---	++	+++	+++	+++
「インフルエンザ」菌	±	---	±	±	—	+	±	—
腦脊髄膜炎菌	±	---	—	+	+	---	±	+
葡萄狀球菌	±	---	—	—	---	—	—	---
緑膿菌	—	+++	±	+	++	—	+	---
肺炎雙球菌	±	—	+++	+	---	++	±	---
變形菌	—	—	±	++	+++	++	—	---
バング氏菌	—	—	—	—	—	—	+	++
「カゼイン」	±	—	—	—	—	±	±	—
血清	—	—	—	—	—	—	±	±
實驗動物	「モルモ ット」80匹 家兎128頭	家兎132頭	「モルモ ット」590匹	家兎148頭	家兎122頭	「モルモ ット」394匹	「モルモ ット」484匹	「モルモ ット」1333匹 家兎203頭

〔注意〕 +++著シク増強、++増強、+稍々増強、---著シク減弱、--減弱、-稍々減弱、±大差ナシ。

ノ動物ヲ用ヒ、以テ個性ノ差異ニヨル誤ヲ避ケ
タリ。尙實驗動物トシテハ「モルモット」又ハ家兎
ヲ用ヒ、「マウス」ハ之ヲ使用セザリキ。コレ「マ
ウス」ハ其體小ニシテ一定セル成績ヲ得難ク、經
驗上此種ノ實驗ニハ不適當ナルヲ以テナリ。

第1表ニ於テ見ル如ク、夫々各種ノ異種細菌ヲ
以テ動物ヲ處置スル時ハ、異種細菌ノ種類ニヨ
リテ病原ニ對スル生體ノ抵抗力ニ動搖ヲ來スヲ
知ル。而シテ一定ノ異種細菌ヲ以テ處置スル時
ハ生體ノ抵抗力ハ著シク増強スルモ、之ニ反シ
テ或ル種ノ異種細菌ニテ處置スル時ハ抵抗力ハ
却ツテ減弱シ、又或ル種ノ異種細菌ニテ處置ス

ル時ハ抵抗力ニ變化ヲ來サズ。勿論同種菌ニテ
モ菌株ノ異ナルニ從ヒテ實驗成績ニ多少ノ變動
ヲ來ス事アルハ考ヘ得ラル、事ニシテ、殊ニ肺
炎雙球菌又ハ連鎖狀球菌ノ如キハ經驗上菌株ニ
ヨリテカナリ差異アルヲ見タリ。サレド少ナク
トモ當時用ヒタル菌株ヲ以テシテハ第1表ニ示
スガ如キ成績ヲ得タリ。之ヲ要スル、一定ノ病
原菌又ハ「トキシン」ニ對スル生體ノ抵抗力増進
ハ、或ル特種ノ異種細菌ニテ處置スル場合ニ、
ミ見ラル、モノニシテ、斯ル抵抗力増進作用ハ
「カゼイン」又ハ血清ノ如キ蛋白體ニ共通ナル作
用ニ非ザル事明カナリ。而シテ特種異種細菌

ニヨル抵抗力増進ノ期間ハ、何レノ場合ニ於テモ、最後ノ注射後 10 日乃至 14 日頃ニ最モ著明ニシテ、5 日目頃ニハ僅カニ増進ノ傾向ヲ示スカ或ハ既ニ相當著明ナル増進ヲ示シ、又 20 日後ニ至レバ抵抗力ハ再ビ減弱スルモ、多クハ全ク消失スルニ至ラズ。

尙此等ノ場合ニ於ケル抵抗力増進ノ原因ニ就テハ、少ナクトモ異種細菌處置後ニ於ケル血液中ニ於ケル凝集價ノ動搖ト抵抗力ノ増減トハ決シテ平行セズ(龍⁽¹¹⁾)、且病原菌「ワクチン」注射時ニ於ケル尿中總窒素排出量ヲ測定比較スルニ、抵抗力増進作用アル異種細菌ニテ處置セル動物

ニアリテハ對照動物ニ比シ窒素排出量少ナキ事實(奥谷⁽⁸⁾⁽⁹⁾)ヨリ見ルニ、異種細菌ニヨル抵抗力ノ動搖ハ、血液中ニ於ケル免疫體又ハ抗體ノ消長ニ關スルモノニ非ズシテ、恐ラク組織ノ細胞其モノ、變質又ハ變調ニ歸スベキモノト認メザルヲ得ズ。換言スレバ、或ル種ノ異種細菌ヲ非經口ニ應用スル時ハ、體組織ノ細胞ハ夫ニヨリテ一定ノ變質(或ハ變調)ヲ來シ、其爲ニ或ル病原ニ對シテハ抵抗力ノ增強ヲ示スモ、他ノ病原ニ對スル抵抗力ハ増進セザルカ或ハ却ツテ減弱スルモノト解セラル。

第二、細菌性發熱ニ對スル微量ノ各種異種細菌ノ影響

凡ソ細菌性發熱ハ、現時ノ見解ニヨレバ、主トシテ細菌毒素ガ組織ノ細胞ニ働キテ其分解ヲ起シ、其分解產物ト毒素トガ體溫調節中樞ヲ刺激スル爲ニ起ルモノナルガ故ニ、今若シ體細胞ノ抵抗力ヲ增強スル作用アルモノヲ與フル時ハ、細胞ハ細菌毒素ノ作用ニ抵抗シテ分解ヲ起シ難ク且同時ニ中樞ノ細胞其モノ、抵抗力モ強メラル、トセバ、發熱ハ抑制又ハ下降スベキ理ニシテ、之ト反對ニ體細胞ノ抵抗力ヲ減弱セシムル作用アルモノヲ與フル時ハ、體細胞ハ細菌毒素ノ爲ニ却ツテ分解セラレ易クナリ、從ツテ發熱ハ却ツテ助長セラルベキ理ナリ。

余等ハ前記ノ系統的實驗ニ於テ、體細胞ニ作用シ以テ病原ニ對スル生體ノ抵抗力ヲ増進セシム

ル作用アル異種細菌ト、反對ニ抵抗力ヲ減弱セシムルモノトアル事ヲ知り得タルヲ以テ、此等ノ異種細菌ガ果シテ細菌性發熱ニ對シテ如何ナル影響ヲ與フルヤヲ検査セリ。

即チ前記ノ實驗ニ於テ當該病原ニ對スル抵抗力ヲ増進スル作用アリト認メタル異種細菌ノ微量ト、抵抗力ヲ減弱セシムル異種細菌ノ微量トヲトリ、「チフス」菌、大腸菌、肺炎雙球菌、連鎖狀球菌(何レモ死菌)ニヨル發熱ニ對スル影響ヲ家兎ニ就テ検査セリ。然ルニ何レノ場合ニモ抵抗力増進作用アル異種細菌(死菌)ノ微量ソレ自ラハ發熱ヲ誘起セザル程ノ微量)ハ、當該病原ニヨル發熱ヲ下降又ハ抑制スル作用アル事ヲ確認シ得タリ(有福⁽¹²⁾、大槻⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾)。即チ

「チフス」菌ニヨル發熱ニ對シ	{ 抑制及解熱作用アルモノ 助長作用アルモノ	{ 肺炎雙球菌 「コレラ」菌 腦脊髄膜炎球菌 葡萄狀球菌
大腸菌ニヨル發熱ニ對シ	{ 抑制及解熱作用アルモノ 助長作用アルモノ	{ 變形菌 綠膿菌 肺炎雙球菌 葡萄狀球菌
肺炎雙球菌ニヨル發熱ニ對シ	{ 抑制作用アルモノ 助長作用アルモノ	{ 綠膿菌 百日咳菌 葡萄狀球菌 「インフルエンザ」菌
連鎖狀球菌ニヨル發熱ニ對シ	{ 抑制作用アルモノ 助長作用アルモノ	{ 大腸菌 變形菌 「チフス」菌 「ペスト」菌

以上ノ場合ニ於テ發熱抑制又ハ解熱作用アルモノハ第 1 表ノ抵抗力増進作用アル異種細菌ニ一致シ、助長作用アルモノハ抵抗力減弱作用アルモノニ一致ス。而シテ此等ノ病原菌「ワクチン」注射時ニ於ケル尿中總窒素排出量ヲ測定比較スルニ、發熱抑制又ハ解熱作用アル異種細菌ノ微量ヲ用ヒタル場合ニハ、他ノ場合ニ比シテ尿中窒素排出量ノ僅少ナル事ヲ證明シ得タリ。此事實ハ特種異種細菌ノ微量ニヨル發熱抑制又ハ解熱作用ハ、體細胞其モノニ作用シテ病原ニ對ス

「インフルエンザ」菌ニヨル發熱ニ對シ	{	抑制作用アルモノ	{ 「チフス」菌 變形菌
		助長作用アルモノ	{ 肺炎雙球菌 葡萄狀球菌
百日咳菌ニヨル發熱ニ對シ	{	抑制作用アルモノ	{ 「チフス」菌 變形菌
		助長作用アルモノ	{ 肺炎雙球菌 淋菌

スベテ上記ノ實驗ニアリテハ、何レモ死菌ニヨ

ル抵抗力ヲ増強セシムル結果ナリトノ見解ニ一致ス。

同様に關係ハ以上ノ外、赤痢(志賀)菌又ハ「バラチフス」B 菌ニヨル發熱ニ對シテモ證明シ得タリ(奥谷⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾)。尙吉井⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾ハ「インフルエンザ」菌、百日咳菌及ビ淋菌ニヨル發熱ニ對スル極メテ微量ノ各種異種細菌ノ影響ヲ檢シタルニ、次ノ如キ成績ヲ得タリ。但シ淋菌ニヨル發熱ニ就テハ未發表ニツキ省略ス。

ル發熱ニ對スル影響ヲ檢査セルモノナリ。

第三、實驗的血行性結核ノ經過ニ及ボス微量ノ特種異種細菌ノ影響

前述セルガ如ク、余等ハ既ニ一定ノ病原ニ對スル生體ノ抵抗力ヲ増進セシムル作用アル異種細菌ノ微量ハ、當該病原ニヨル發熱ヲ下降又ハ抑制スル作用アル事ヲ知りタルヲ以テ、更ニ進ンデ結核菌ノ致死の傳染ニ對スル生體ノ抵抗力ヲ増進スル作用アル異種細菌ノ微量ハ、結核菌ニヨル發熱ニ對シテ果シテ如何ナル影響ヲ與フルヤヲ知ラントシ、尙其際體溫ノミニ止マラズ、其他ノ一般の經過ニ對シテモ如何ナル影響ヲ及ボスヤヲ觀察セントシテ本實驗ニ着手セリ。本實驗ハ昭和 6 年 12 月ヨリ同 10 年 8 月マデノ間ニ行ヒ、實驗動物トシテハ主トシテ家兎ヲ使用シ、一部ハ「モルモット」ニ就テモ之ヲ行ヘリ(龍⁽²¹⁾⁽²²⁾)。而シテ家兎ニ就テノ實驗ハ前後 7 回、「モルモット」ニ就テノ實驗ハ 3 回之ヲ反復シテ實驗成績ニ誤謬ナカラン事ヲ期セリ。

家兎ニ就テノ各實驗列ニアリテハ、豫メ毒力著シク強キ人型結核菌(生菌)ノ大量(體重 1Kg ニツキ多クハ 5—7mg, 時トシテハ 10mg)ヲ靜脈内ニ注射ス。然ル時ハ長期間ノ觀察ニ適當ナル

慢性血行性結核ヲ各家兎ニ略々平等ニ惹起セシメ得ベク、其際病變ハ肺ニ於テ最モ顯著ナリ。次デ「アレルギー」ノ發生ニ充分ナル期間ヲ待チ、即チ 6 週乃至 2 ヶ月後ニ至リテ生き殘リタル動物ヲ 2—3—4 群ニ分チ、其中ノ 1 群ヲハ特種異種細菌ノ微量ヲ以テ處置シ、他ノ 1 群ハ對照動物トシテ其儘トナシ、尙或ル實驗列ニアリテハ他ノ 1 群ヲ他ノ異種細菌ヲ以テ處置シツツ、其經過ヲ 4 乃至 9 ヶ月ニ互リテ比較觀察セリ。而シテ觀察期間中ハ毎日 3 回體溫ヲ測定シ、且毎週 1 回體重ヲ、1 ヶ月—1 回赤血球沈降速度ヲ測定セリ。

特種異種細菌トシテハ「チフス」菌加淋菌(T.G.)ヲ使用セリ。コレ結核菌ノ血行性致死の傳染ニ對スル生體ノ抵抗力檢査ニ際シ、「チフス」菌加淋菌ガ抵抗力増強作用最モ強キ事ヲ知り得タルガ故ナリ(龍⁽¹⁰⁾)。而シテ本實驗ニアリテハ、抵抗力檢査ノ實驗ニ際シテ結核菌ニ對スル生體ノ抵抗力ヲ増強セシムル作用アル事ヲ確メタル菌株ヲ使用シタル事勿論ナリ。而シテ 0.5%石炭酸

加生理的食鹽水 1ccm 中「チフス」菌 $1/12$ mg 淋菌 $1/4$ mg ヲ混合シタルモノヲ原液トナシ、之ヲ適宜ニ稀釋シテ使用セリ。用量ハ體溫曲線、體重ノ増減及ビ其他ノ一般狀態ヲ考慮シツ、常ニ反應(主トシテ發熱)ヲ起サザル程ノ微量(即チ刺激セザル量)ヲ用ヒル事ヲ原則トセリ。而シテ實際上ニ於テハ一回量原液 0.000 0001—0.0001 ccm ニ相當スル量ヲ每週一回皮下注射セリ。

今得タル成績ノ大要ヲ述ブレバ次ノ如シ。體溫ハ最初ハ何レノ家兎ニアリテモ略々同様ナル微熱ヲ示セドモ、特種異種細菌ノ微量ニテ處置セル群ニアリテハ、體溫ハ例外ナク漸次ニ下降シ

テ早晚(多クハ 12—20 回注射後頃ヨリ)正常トナリ、加之特有ナル所見トシテ 1 日中ニ於ケル體溫ノ動搖著シク減少ス。體重ハ對照動物ニ比シ漸次ニ増加シ、赤血球沈降速度モ亦漸次ニ再ビ緩徐トナルカ又ハ對照動物ノ夫ヨリモ一般ニ緩徐トナル。尙對照動物ハ死スルモ、治療群ハ大多數死セズシテ疾病ヨリ恢復ス。

本實驗ノ詳細ナル記錄ハ、各實驗列ノ體溫曲線ト共ニ既ニ東京醫學會雜誌(龍⁽²¹⁾)ニ報告シタルヲ以テ、茲ニハ之ヲ省略スレドモ、今參考ノ爲ニ一實驗列ノ成績ヲ表示スレバ第 2 表ノ如シ。

第 2 表 第三實驗列成績一覽

(結核菌注射：昭和 7 年 12 月 18 日；治療期間：昭和 8 年 2 月 24 日—同 9 月 7 日)

家兎番號	體 溫	體 重 (g)		赤血球沈降速度 —時間値(mm)		備 考		
		治 療 前 (23/II)	治 療 後 (7/IX)	治 療 前 (1Ⅴ/II)	治 療 後 (28/VIII)			
T セン G ニ テ結核 治療兎	109	漸次下降、16--17 回目ノ注射頃ヨリ 正常トナリ一日中 ノ動搖著シク減少 ス		2010	2770	7.5	2.0	生存
	110	"		1650	2660	5.0	4.0	"
	112	"		1870	2480	11.0	3.5	"
	114	"		1600	2300	14.5	4.0	"
	115	"		2300	2600	9.0	7.0	"
	117	"		1790	2400	12.5	7.0	"
非結核 治療兎	119	下 降 セ ズ		1880	2120	4.0	32.0	生存
	123	"		1530	2030(18/V)	9.5	27.0(25/IV)	死亡(18/V)
	124	"		1520	2050(11/V)	12.0	41.0(25/IV)	"(17/V)
	125	"		1700	1770(3/VIII)	8.0	41.0(27/VII)	"(7/VIII)
	127	"		1800	1650(11/V)	7.0	25.0(25/IV)	"(16/V)
	128	"		1780	2400	5.0	24.0	生存
正家 常兎	129			1720	3110	1.0	1.0	
	130			1770	2940	1.5	1.0	

實驗成績ニ關シテ特ニ注意スベキ事ハ、體溫ハ毎回ノ注射後ニ於テハ殆ンド認ムベキ影響ヲ示サザレドモ、特種異種細菌ノ微量(反應ヲ誘起セザル程ノ微量)ヲ幾回カ復注射スル中ニ、漸次ニ下降シ來リ、且或ル一定ノ時期ニ至レバ一日中ニ於ケル動搖ノ著シク減少スルヲ見タリ。而

シテスル時期ニ至レバ體重ハ益々増加ノ傾向ヲ示シ、赤血球沈降速度ハ漸次緩徐トナリ、一般狀態ノ著シク良好ニ向フヲ見タリ。

後ニ記載スル臨牀例ニ於ケル體溫曲線トノ比較ニ便センガ爲ニ、次ニ T.G. ニテ治療セシ結核家兎ノ體溫曲線ヲ二例示スベシ。

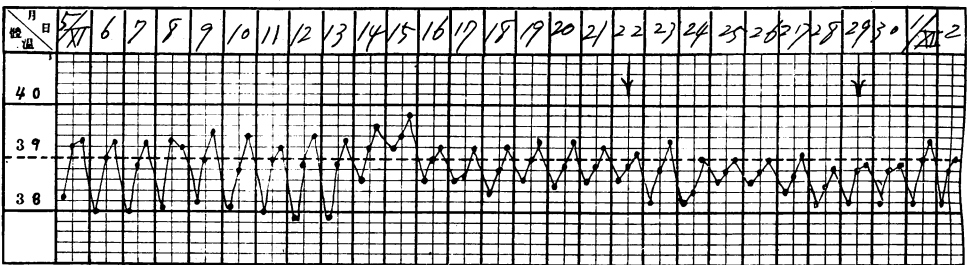
昭和9年

結核家兎 No. 208 體溫表(a)



昭和9年

結核家兎 No. 212 體溫表(a)



「モルモット」ノ血行性結核ニアリテモ、治療群ハ一般ニ對照群ニ於ケルヨリモ長時間生存セ

リ。サレド其經過急性ニシテ其差家兎ニ於ケル程ニ著明ナラズ。

第四、臨牀的經驗

額田ハ既ニ大正15年ニ一部ノ動物試験ニヨリ特種異種細菌ガ結核菌ニ對スル生體ノ抵抗力ヲ増進スル作用アル事ヲ認メタルニヨリ、爾來動物試験ヲ繼續スル傍ラ、一面ニ於テハ昭和2年以來引キ續キ微量ノ特種異種細菌(T.G.)ヲ臨牀上肺結核患者ニ試ミツ、アリ。而シテ其成績ハ昭和4年及ビ昭和5年ニ雑誌臨牀醫學ニ報告セシ事アリ。尙成績ノ正確ナラン事ヲ期スル爲ニ、既ニ當時ヨリ名大勝沼教授ニ批判ヲ依頼シ、同教室ニ於ケル成績ノ第一回報告ハ結核第9巻第5號(昭和6年)ニ公表セラレタリ(安藤、森)。サレド當時ニ於テハ治療期間短ク、從ツテ注射回数僅少ニシテ且注射量モ比較的大ナリキ。コレ各注射毎ニ多少トモ何等カノ影響アル事ヲ待セシガ故ナリ。

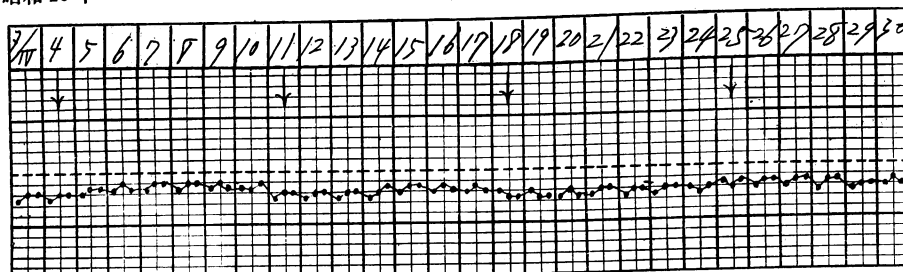
然ルニ昭和7年ニ至リ、前記實驗的血行性結核ノ經過ニ及ボス微量ノ特種異種細菌ノ影響ニ就テノ動物試験ヲ經驗スルニ及ビ、爾來臨牀上ニ

於ケル使用ノ方針ヲ全ク變スルニ至レリ。即チ該動物試験ニ當リテハ、毎回ノ注射ニヨリテハ殆ンド何等ノ影響ヲモ認メザリシガ、何等ノ反應ヲモ誘起セザル程ノ極メテ微量ヲ長期間ニ互リテ反復注射スル時ハ、或ル一定ノ時期ニ至レバ、對照動物ハ死スルニ反シ、治療動物ニアリテハ殆ンド例外ナク其經過ハ著シク良好ニ向ヒ、遂ニ疾病ヨリ恢復スル事ヲ經驗セリ。夫故ニ臨牀上ニ於テモ亦、反應ヲ起サザル程ノ極メテ微量ヲ長期間ニ互リテ使用スルノ方針ヲトリ、毎回ノ注射ニ對シテハ何等ノ認ムベキ影響ヲ期待セザル事トナセリ。次ニ余等ガ最近特種異種細菌ヲ使用スルニ際シテ特ニ注意セル事項ノ大要ヲ述ブベシ。

特種異種細菌ハ動物試験ノ際ニ用ヒタルト同一ノモノヲ用ヒ居レリ。而シテ其用量ハ原液0.000 0001ニ相當スル量ヨリ最大0.05—0.1ニ相當スル量ヲ使用シ居レリ。(以下注射量トシテ

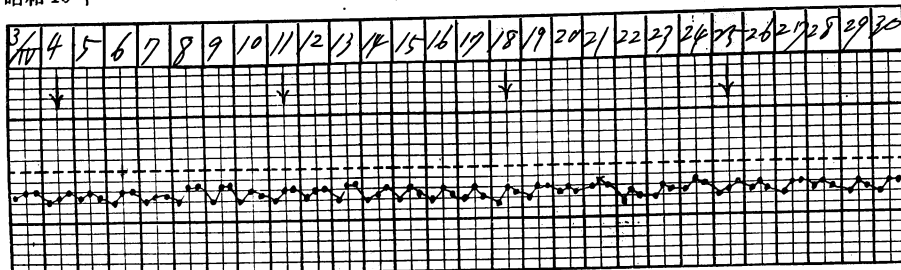
昭和 10 年

結核家兎 No. 208 體溫表(b)



昭和 10 年

結核家兎 No. 212 體溫表(b)



記載セルハスベテ原液ニ相當スル量ナリ)。而シテ便宜上 10 倍、100 倍、1000 倍、10000 倍、100000 倍、1000000 倍ノ 6 種ノ稀釋液ヲ作製シ置キテ使用ニ便セリ。

今實際上各場合ニ於テ如何ナル量ヲ使用セルヤト云フニ、用量ハ常ニ反應(主トシテ發熱、及ビ水泡音ノ増加)ノ起ラザル範圍ニ止ムルヲ原則トス。サレド周知ノ如ク肺結核ノ際ニ於ケル「アレルギー」、殊ニ過敏性ノ程度ハ、各患者竝ビニ其時々ノ狀態ニヨリテ著シキ差異アルヲ以テ、用量ハ著シク個人化スルヲ要ス。從ツテ診察ニ當リテハ必ズ「レントゲン」寫眞ヲ撮影シテ、病竈ノ擴ガリ竝ビニ其病型、例ヘバ小結節型カ又ハ結節型カ——夫ハ主トシテ滲出性カ又ハ増殖性カ——播種型(粟粒結核)カ、氣管枝肺炎性又ハ肺炎性浸潤カ、硬化型(纖維型)カ、所謂早期浸潤カ、原發簇カ、空洞ノ有無等ヲ觀察シ、體溫曲線ヲ參考トシツ、慎重ニ如何ナル量ヲ注射スベキヤヲ考慮ス。

然レドモ斯クテモ尙實際上ニ於テハ過敏性ノ程度ヲ正確ニ豫知シ得ザルヲ以テ、通常ハ初回ニ 0.000001—0.0000001 ヲ試ム。但シ夫程過敏ナラ

ズト思ハル、場合ニハ夫ヨリモ大量 (0.00001 又ハ夫以上) ヨリ始ムル事アリ。之ニ反シ高熱アリテ非常ニ過敏ナル恐アル場合ニハ一定時日ノ間經過ヲ觀察シ、病勢ノ稍々落付キタル頃ヲ見計ヒテ 0.0000001 ヲ試ム。而シテ若シ此量ニテモ反應アル時ハ本注射ニ適セズトシテ、少クトモ暫時注射ヲ見合ハス事トナセリ。又小兒ニアリテモ 0.0000001 ヨリ注射ス。大體ヨリ云フ時ハ、急性ノ高熱アル患者ハ多クハ著シク過敏ナルヲ以テ本注射ニ適セズ、之ニ反シ慢性ニシテ停止性ノ傾向大ナル程本注射ノ適應症ナリト云フヲ得ベシ。

注射ハスベテ皮下注射トシ、間歇ハ通常 1 週間トス。注射後ハ常ニ其後 1 週間ノ熱型ニ注意シ、發熱ノ傾向ナキ時又ハ多少トモ下降スル傾向ヲ示ス時ハ次回モ亦同量ヲ注射ス。斯クシテ二三回(乃至四五回)反復同量ヲ注射スルモ體溫上昇ノ傾向ナキカ又ハ順調ナル經過ヲ示ス時ハ、初メテ約倍量ニ増加ス。斯クシテ例ヘバ 0.0000001 → 0.0000002 → 0.0000003 → 0.0000005 → 0.000001 → ……ノ如ク順次ニ増加シテ遂ニ 0.05—0.1 ニ達シ得。之ニ反シテ若シ注射後發熱(又ハ水泡

音増加)ノ傾向アル時ハ次回ノ注射量ヲ著シク(例ヘバ $1/100 \rightarrow 1/1000$ 又ハ夫以下ニ)減少ス。但シ其際婦人ニアリテハ月經期前發熱ヲ考慮スル事ハ勿論ナリ。尙寒冒時ニハ過敏ナルヲ以テ注射ヲ避ク。自覺的ニ寒感冒ヲ訴ヘザル場合ニモ、咽頭部ニ充血ヲ認ムル時ハ注射ヲ見合ハスカ又ハ減量スル事トセリ。又大咯血時ニハ病竈反應ヲ考慮シテ注射ヲ行ハズ。此他本注射ノ施行中ハ解熱劑ヲ與ヘズ。コレ解熱劑ヲ與フル時ハ反應

ノ有無ヲ知リ得ズ、從ツテ適當ナル用量ヲ決定シ得ザルガ故ナリ。尙本注射ノ施行中ハ已ムヲ得ザル場合ノ外、他ノ注射藥ノ注射ヲ行ハザル事トセリ。

注射ハ成ルベク長キ期間(半年乃至1年以上3年位)ニ亙リテ行フ方針ヲトリ、最近ハ便宜上30回注射ヲ以テ1「クール」トナシ居レリ。解熱後モ引キ續キ注射ヲ行フ事ハ勿論ナリ。

余等ハ茲ニ最近ニ於ケル臨牀例ヲ報告スルニ當

第五、臨牀例

A. 外 來 患 者

	既往症及主訴	所 見	治療期間及生活狀態
第 1 例 女、9歳、學生	4ヶ月前ヨリ微熱(最高 37.0°C)及咳嗽アリ	體格、榮養共ニ不良ナル中等大ノ少女、右肺下部ニ前後兩面ヨリ多數ノ水泡音ヲ聴ク レ所見：兩側肺尖部(殊ニ右側)ニ稍著明ナル小斑點ヨリ成レル影像アリ、尙右肺ノ中部ヨリ下部ニ互リテ多數ノ不規則ナル弱キ斑點存在シ、左側肺門部附近ニモ數多ノ斑點ヲ認ム	昭和9年10月16日— „ 10年10月21日 1ヶ年間 通學ヲ中止シ、家庭ニテ普通ニ起居セシム
第 2 例 男、24歳、研究室助手	約4ヶ月前ヨリ微熱、($37.1.2^{\circ}\text{C}$)及盜汗アリ 近來次第ニ瘦削スト云フ、常ニ胃腸障礙ヲ訴フ	體格薄弱ナル瘦削セル大ナル男子、胃下垂アリ レ所見：兩肺ノ各所殊ニ右肺ノ中部ヨリ下部並ビニ左肺ノ上部ニ小斑點散在シ、且右側肺尖部ニモ大斑點狀雲翳ヲ認ム	昭和11年9月30日— „ 12年3月30日 (治療中) 約2ヶ月ノ間ハ勤務ヲ中止シ、家ニテ普通ノ生活ヲナサシメ、12月頃ヨリ實驗室ニ勤務ス
第 3 例 女、18歳、事務員	3ヶ月程前ニ右側肋膜炎ニ罹リ、夫レ以來微熱($36.9-37.0^{\circ}\text{C}$)アリ	體格、榮養中等ナル中等大ノ女子 レ所見：右側肺尖部ヨリ鎖骨下ニ互リテ廣汎性ニ潤濁アリ、兩側肺ノ各所ニ弱キ小斑點散在ス	昭和11年4月28日— „ 11月17日 約7ヶ月 勤務續行
第 4 例 男、20歳、事務員	近來最高 37.1°C ノ微熱アリ	體格、榮養共ニ中等度ノ中等大ノ男子、右肺前面中央ヨリ下部ニ水泡音ヲ聴取ス レ所見：右肺ノ全領域殊ニ中央部ヨリ下方ニ互リ、多數ノ不規則ナル大小ノ弱キ斑點稠密ニ存在シ、且左肺ノ上領域ニモ多數ノ弱キ癒合性斑點アリ、右側肺尖部ニモ雲翳ヲ認ム	昭和11年2月22日— „ 10月24日 8ヶ月間 勤務ヲ繼續シツ、治療ス
第 5 例 女、48歳、會社員妻	2週間前ヨリ最高 37.5°C ノ微熱アリ、胃腸障礙ヲ覺エ、且咳嗽アリ	體格榮養共ニ不良ナル小ナル女子、兩側肺尖部及右側前上部ニ水泡音ヲ聴取ス レ所見：右側肺尖部ヨリ鎖骨下ニ互リテ弱キ廣汎性雲翳ヲ認メ、右肺ノ其他ノ領域ニハ多數ノ弱キ小斑點散在ス、左肺上部ニモ弱キ數多ノ小斑點存在シ、左肺尖部ニモ弱キ雲翳ニテ充タサル	昭和11年11月28日— „ 12年3月30日 (治療中)
第 6 例 男、23歳、商人	數ヶ月前ヨリ時々胸痛ヲ訴ヘ、近來瘦削セルト云フ、微熱最高 $36.9-37.0^{\circ}\text{C}$ 。時ニ $37.3-37.8^{\circ}\text{C}$ ニ上昇スル事アリ、母ハ肺結核大	體格中等度ノ瘦セル中等大ノ男子 レ所見：兩肺ノ上部ニハ弱キ小斑點散在シ、肺門部ニ向ヘル數多ノ線索ニ連絡ス兩肺ノ下部ニハ弱キ多數ノ小斑點アリ、尙擴大セル右側肺門部附近並ビニ左側肺門部ニハ二三ノ稍大ナル強キ斑點ヲ認ム、輕度ノ右側横隔膜癒著	昭和11年12月7日— „ 12年3月30日 (治療中) 過度ノ勤勞ヲ避ケツ、普通ニ商賣ヲ繼續ス

リ、單ニ病歴ト體溫表トヲ記載スルニ止メ、統計的觀察ヲ掲ゲザル事トセリ。コレ肺結核ノ病型ハ極メテ多様ナルヲ以テ、患者ノ種類及ビ其選擇如何ニヨリテ統計上ノ成績ハ如何様ニモ影響セラル、ヲ以テナリ。

余等ハ茲ニ本注射ノ臨牀的價値ニ就テ一般的結論ヲ下サントスルモノニハ非ズ。サレド昭和7年以來昭和12年3月末マデニ比較的長期間ニ亙リテ本注射ヲ試ミタル233例ニ就テノ經驗ニ

ヨレバ、各場合ニ夫々適合セル量ノ注射ヲ長期間ニ亙リテ續行スル時ハ、一定ノ時期ニ至レバ殆ンド例外ナク體溫ハ正常ニ復スルノミナラズ、殊ニ特有ナル興味アル所見トシテ舉グベキハ、一日中ニ於ケル體溫ノ動搖ガ著シク減少シ、其體溫曲線ハ恰モ特種異種細菌ニテ治療セシ血行性結核家兎ノ體溫曲線ニ著シク類似スル事ナリ(體溫表參照)。斯ル時期ニ至レバ其他ノ症狀及ビ一般狀態モ亦著シク良好ニ向フヲ見タリ。

注 射 量 及 同 數	經 過		
	體 溫	體重及赤血球沈降速度 (1時間値、入院前) (食前、外來ハ晝食前)	症 狀 其 他
同 0.000005(2)0.000001(11)0.000002(10) 0.000001(2)0.000002(2)0.000003(2) 0.000005(2)0.000001(2)0.000002(4) 0.000001(1) 計38回	治療開始後約2ヶ月頃 ヨリ最高 36.7°C ヨリ 上昇スル事ナク、弛張 少キ體溫ヲ示シ、其後 ハ再び發熱セズ	21Kg(9.10.6) 24.200Kg(10.3.16) 25.200Kg(10.10.21)	水泡音減少シ、次第 消失シタルモ、風邪ノ後 ニハ時々出現ス
0.000001(2)0.000002(2)0.000003(2) 0.000005(1)0.000001(2)0.000002(2) 0.00005(2)0.0001(2)0.0002(3) 0.0005(3)0.001(2)0.002(2) 計25回(12.3.29)	治療開始後次第ニ下降 シ、夕方36.4—36.6°C 位ノ體溫ヲ示シ、引き 續キ上昇スル事ナシ	44.200Kg(11.10.9) 47.500Kg(12.2.26) S.R. 2mm(12.3.29)	元氣著シク恢復シ、從 來風邪ニ罹リ易カリシ モ、此冬ハ一同モ寒冒 ニ罹ラズト云フ
0.000001(2)0.000002(2)0.000003(2) 0.000005(2)0.000001(1)0.000002(2) 0.00003(2)0.00005(2)0.0001(2) 0.0002(2)0.0003(2)0.0005(2) 0.001(2)0.002(2)0.003(2) 計29回	次第ニ下降シ、1ヶ月 後頃ヨリ最高 36.4— 36.6°C トナリ、引き續 キ1日中ニ於ケル體溫 ノ動搖著シク少シ	42.300Kg(11.5.9) 40.400Kg(11.11.17) S.R. 19mm(12.3.23)	レ所見：右側肺尖部ノ 溷濁ハ斑點狀トナリ、 他ノ領域ノ斑點ハ限局 シテ線索狀トナレリ
0.000001(2)0.000002(2)0.000003(2) 0.000004(1)0.000005(2)0.00001(2) 0.00002(2)0.00003(2)0.00005(2) 0.0001(2)0.0002(1)0.0003(1) 0.0005(2)0.001(2)0.002(1) 計26回	治療開始後約1ヶ月頃 ヨリ最高 36.8°C 以上 ニ昇ル事ナク、3ヶ月 頃ヨリ最高 36.4 乃至 36.5°C ノ弛張少キ體 溫ヲ示シ、其後ハ引き 續キ發熱スル事ナシ	55.600Kg(11.2.22) 56.700Kg(11.10.24)	水泡音ハ治療開始後時 時之ヲ聴取シタルモ、 約4ヶ月頃ヨリ之ヲ聴 取セズ レ所見：斑點限局シテ 著明トナル
0.000001(3)0.000002(1)0.000003(2) 0.000005(1)0.00001(1)0.00002(1) 0.00003(1)0.00004(1)0.00005(2) 0.0001(2)0.0002(2) 計17回(12.3.30)	治療開始後約2ヶ月頃 ヨリ 36.8°C 以上ニ上 ル事ナク、弛張少キ體 溫ヲ示セリ	39.800Kg(11.11.28) 41.500Kg(12.2.23)	約2ヶ月後頃ヨリ水泡 音ヲ聴取セズ
0.00001(2)0.00002(2)0.00005(1) 0.000001(1)0.00001(2)0.00002(1) 0.00001(1)0.00002(2)0.00003(1) 0.00005(2)0.0001(1) 計16回(12.3.31)	次第ニ下降シ、治療開 始後約2ヶ月頃ヨリ最 高 36.7—36.6°C トナ リ、1日中ニ於ケル體 溫ノ動搖著シク減少セ リ	49.300Kg(11.12.9) 50.400Kg(12.3.1)	胸痛消失ス

第 7 例 女、16歳、學生	2ヶ月以來最高 37.5°C 乃至 37.0°C ノ微熱アリ	體格中等、榮養可良ナル小ナル女子、兩側肺ノ後上部及中央部ニ水泡音ヲ聴取ス、尿ニ蛋白(+)ノ所見：右肺尖部ヨリ中央部ニ互リ竝ビニ左肺ノ全領域ニ多數ノ弱キ小斑點ノ播布セルヲ認ム	昭和11年10月31日— 、12年3月30日 (治療中) 通學繼續
第 8 例 女、17歳、學生	近來倦怠、食慾不振ヲ訴ヘ、體溫ハ時々 37.0°C 乃至 37.5°C ニ上昇ス	體格、榮養共ニ不良ナル小ナル女子、右側肺ノ上部及ビ時々左側肺尖部ニ水泡音ヲ聴取スノ所見：兩側肺ノ殆ンド全領域ニ互リテ小斑點散在シ、其中ノ或ルモノハ強キ影像ヲ示ス	昭和6年10月3日— 、10年7月12日 4年間 通學繼續
第 9 例 女、39歳、商人妻	近來瘦削シ、咳嗽、喀痰激シク、體溫ハ朝 35.8°C 夕方 36.9—37.0°C ノ不規則ナル熱型ヲ示ス	體格、榮養共ニ中等度ナル大ナル女子、兩側肺尖部及左側鎖骨下部ニ水泡音ヲ聴クノ所見：右肺ノ全領域ニ互リ多數ノ稍々著明ナル不規則ノ癒合性斑點ヲ認メ、且左肺ノ上部ニモ弱キ斑點稠密シテ存在ス	昭和8年12月30日— 、10年5月3日 約1年半 家庭内ニテ普通ニ起居ス
第 10 例 女、17歳、學生	朝激シキ咳嗽アリ、體溫ハ 37.0—37.2°C ノ不規則ナル微熱ヲ示ス	體格中等、榮養可良ナル中等大ノ女子、右側肺前面ノ全部竝ビニ後面上部ヨリ中央迄ニ有響性水泡音ヲ聴ク、ノ所見：兩側肺尖部及右肺上部ニ多數ノ弱キ小斑點ヲ認ム	昭和7年6月30日— 、8年9月22日 約1年3ヶ月 通學繼續
第 11 例 男、26歳、製本業	近頃盜汗及微熱(最高 37.0—37.2°C)アリ、多少ノ喀痰ヲ出ス	體格中等、稍々瘦セタル中等大ノ男子、左側肺尖部ニ時々僅少ノ水泡音ヲ聴クノ所見：右側鎖骨下部ノ稍々側方ニ寄りタル所ニ弱キ橢圓形影像ヲ認メ、且兩側肺上部ヨリ多數ノ線索出テ、肺門部ニ入ル、右側橫隔膜ニ著明ナル癒著アリ	昭和7年4月20日— 、9年8月7日 約2年4ヶ月 普通ニ仕事ヲ續行
第 12 例 女、36歳、會社員妻	近來倦怠ヲ覺エ、夕方 38.0—38.4°C ノ發熱アリ	體格榮養共ニ不良ナル大ナル女子、左肺全部ニかなり多數ノ水泡音ヲ聴取スノ所見：右側ニ於テハ肺尖部ヨリ中部ニ互リテ著明ナル不規則ノ廣汎性影像ニテ充タサレ殊ニ鎖骨下ノ側方ニ於テ著シ、左肺ニ於テハ殆ンド全領域ニ互リ稍々著明ナル不規則ノ小斑點密在シ、殊ニ肺尖部ヨリ鎖骨下ニ互リテ廣汎性ニ瀾濁ヲ呈セリ	昭和11年3月31日— 、12年3月30日 (治療中) 家庭ニ於テ普通ニ起居
第 13 例 女、43歳、實業家妻	平素風邪ヲ引キ易ク、37.1—37.3°C ノ微熱アリ	體格可良、榮養中等度ナル大ナル女子、左肺尖部及左側後下部ニ水泡音ヲ聴クノ所見：右側肺尖部ヨリ鎖骨下部ニ互リテ弱キ雲翳ヲ認メ、左側肺尖部ニモ弱キ大斑點アリ、尙右側肺ノ各所ニ著明ナル小斑點ヲ認ム、右側橫隔膜癒著	昭和7年6月29日— 、12年3月30日 (治療中) 普通ニ起居、繁忙ナル生活ヲ營ム
第 14 例 女、21歳、教員	約3ヶ月以來 37.5°C 位ノ微熱アリ、倦怠ヲ覺ユト訴フ	體格榮養共ニ中等度ナル貧血性ノ中等大ノ女子、兩側肺尖部及右側中央部ニ水泡音ヲ聴ク、ノ所見：右側肺尖部ヨリ鎖骨下ニ互リ竝ビニ左側肺尖部ニ弱キ瀾濁性雲翳アリ、尙右肺ノ上部及中部竝ビニ左肺ノ上部ニ強弱ノ小斑點散在ス、右側肺門部ニ二三ノ最も著明ナル大斑點アリ(石灰沈著)、兩側橫隔膜癒著	昭和7年3月22日— 、12年3月30日 (治療中) 教鞭ヲトルコトヲ中止シ、家庭内ニテ普通ニ起居セシム、後編輯事務所ニ勤務

0.000001(2)0.000002(2)0.000003(2) 0.000005(2)0.00001(2)0.00002(2) 0.00005(3)0.0001(1) 計16回(12.3.9)	治療開始後約2ヶ月頃 ヨリ最高 37.0°C 以上 ニ上昇スル事ナク、ソ ノ後次第ニ下降シ、約 15回注射後ハ最高36.7 —36.8°C ニシテ弛張 少キ體溫ヲ示セリ	37.300Kg(11.11.7) 38.300Kg(12.3.1) S.R. 19mm(11.12.25)	水泡音減少セシモ、完 全ニ消失スルニ至ラズ 時々左側後中部ニ之ヲ 聴ク
0.0005(1)0.001(2)0.002(1)0.005(1) 0.01(9)0.003(1)0.001(1)0.005(7) 0.01(4)0.02(13)0.01(1)0.001(2) 0.00005(3)0.0001(12)0.0002(6) 0.0001(1)0.0002(6)0.0001(9)0.0002(6) 0.000001(1)0.0002(3)0.000001(1) 0.0001(2)0.0002(2)0.0003(2) 0.000001(1)0.0001(1)0.000001(1) 0.0001(1)0.0003(2)0.0005(2)0.001(2) 計107回	治療開始後約2ヶ月頃 ヨリ 37.0°C ニ上昇ス ル事ナク、其後益々下 降シ、夕方36.5—36.7 °C トナル、但し時折月 經ノ前期ニ 36.9°C 位 ニ上昇スル事アリタル モ、1年後頃ヨリ之モ 又下降シ、弛張少キ正 常體溫ヲ示セリ	40.700Kg(6.10.3) 41.500Kg(7.7.1) 42.250Kg(8.11.6)	水泡音ハ8年9月頃マ デハ時々出現セシモ、 其後ハ引キ續キ消失ス ル所見：斑點ハ大部分 消失シ、所々ニ少數ノ 強キ斑點ヲ認ムルノミ トナル
0.000001(2)0.000005(2)0.00001(3) 0.000001(1)0.00001(4)0.00002(2) 0.00005(1)0.0001(1)0.000001(1) 0.0001(1)0.0005(1)0.001(2)0.005(1) 0.001(3)0.002(2)0.0001(1)0.002(2) 0.005(3)0.01(4)0.02(4)0.03(2)0.05(7) 計50回	治療開始後約3ヶ月頃 ヨリ夕方36.7—36.6°C ニナリ、其後半年頃ヨ リ夕方 36.4—36.5°C ノ規則正シキ體溫ヲ示 シ、ソノ後再び上昇ス ル事ナシ	54Kg(8.12.25) 58Kg(9.6.25) 60Kg(10.5.3)	咳嗽、喀痰次第ニ減少 シ、治療開始後1年頃 ヨリ消失ス、水泡音ハ 風邪ノ後ニ僅少ニ聴取 スルノミトナリ、1年後 ニハ聴取セザルニ至ル ル所見：殆ンド斑點ヲ 認メズ
0.001(6)0.002(3)0.0001(4)0.0002(1) 0.0001(3)0.0002(8)0.0001(1)0.0002(1) 0.001(1)0.0001(2)0.00001(1) 0.000001(1) 計32回	治療開始後1ヶ月頃 ヨリ夕方37.0°Cニ上昇 スル事ナク、36.7—36.8 °C ニシテ時々 36.9°C ニナリタリ、ソノ後2 ヶ月頃ヨリ夕方36.5 —36.7°Cニシテ弛張少 ク、引キ續キ良好ナリ	48.500Kg(7.7.6) 55.500Kg(8.9.22)	1ヶ月後ヨリ水泡音減 少シ、時々肺尖部ニ之 ヲ聴取セシモ、約1年 後ヨリハ全然聴取セズ
0.001(2)0.002(1)0.005(3)0.01(3) 0.02(4)0.001(1)0.01(2)0.02(26) 0.03(7)0.000001(1)0.00001(2) 0.0001(1)0.01(1)0.02(1)0.001(1) 0.01(1)0.02(2)0.03(4)0.01(1)0.03(3) 計67回	37.0—37.2°Cノ微熱ハ 治療開始後次第ニ下降 シ、2ヶ月後ニハ夕方 36.7—36.6°Cノ平熱ト ナリタリ	48.300Kg(7.4.22) 49.700Kg(9.7.7)	時々聴取セル水泡音ハ 次第ニ消失セリ 盗汗ハ4回目ノ注射後 頃ヨリ消失セリ
0.000001(2)0.000002(2)0.000003(2) 0.000005(2)0.00001(2)0.00002(2) 0.00003(2)0.00005(2)0.0001(2) 0.0002(1)0.0003(2)0.0005(2)0.001(3) 0.002(2)0.003(2)0.005(2)0.01(2) 0.02(2)0.03(4)0.04(5) 計45回(12.3.30)	治療開始後1ヶ月頃 ヨリ夕方37.0°C位ノ體溫 ヲ示シ、時々夕方37.5 °Cニ上昇スルノミトナ リ、其後2ヶ月頃ヨリ 夕方 36.5—36.7°Cニ ナリ、次第ニ弛張少キ 平熱ヲ示セリ	42Kg(11.4.4) 43.500Kg(12.2.16) S.R. 75mm(12.3.30)	治療開始後約4ヶ月頃 ヨリ水泡音ヲ聴取セズ 其後ハ過勞、風邪ノ後 ニ之ヲ聴クノミトナリ タリ レ所見：左右肺共ニ影 像著シク限局シテ著明 トナレリ
0.001(2)0.002(2)0.0001(1)0.001(2) 0.002(1)0.005(2)0.01(2)0.02(3) 0.03(5)0.02(1)0.001(4)0.01(3) 0.001(3)0.01(1)0.001(2)0.01(2) 0.02(1)0.03(2)0.05(37)0.01(1) 0.001(1)0.02(1)0.05(5)0.01(1)0.02(1) 0.01(1)0.05(41)0.01(1)0.05(41) 0.000001(1)0.05(11)0.01(1)0.05(3) 0.1(3) 計189回(12.3.29)	治療開始後約1年頃ハ 多クハ 36.7°C 位ヲ示 シテ時々 37.0°Cニ達 シ、1年半頃ヨリハ、 36.5—36.6°Cノ規則正 シキ平溫ヲ示セリ	48.900Kg(7.7.15) 53.300Kg(11.2.6) 50.300Kg(12.1.15) S.R. 13mm(12.3.29)	水泡音ハ治療開始後間 モナク消失シ、時々之 ヲ聴取セシモ、其後全 然之ヲ聴取セザルニ至 レリ レ所見：左上部ニ殆ンド 影像ヲ認メズ
0.001(1)0.0005(2)0.001(3)0.002(2) 0.003(2)0.005(2)0.01(2)0.02(4) 0.001(2)0.002(1)0.01(3)0.00001(1) 0.001(1)0.0001(1)0.001(3)0.01(11) 0.001(3)0.000001(2)0.001(7)0.002(1) 0.003(9)0.002(11)0.00001(1)0.001(3) 0.002(3)0.003(2)0.005(1)0.0001(1) 0.002(1)0.001(1)0.002(2)0.003(2) 0.01(2)0.02(1)0.01(1)0.02(6)0.03(4) 0.02(5)0.03(18)0.02(2)0.03(1)0.05(3) 計134回(12.3.27)	治療開始後約1ヶ月後 ヨリ夕方 37.0°C 以上 ニ上昇スル事ナク、2 ヶ月後ヨリ夕方36.5— 36.7°Cニナリ、其後モ 引キ續キ弛張少キ平熱 ヲ呈セリ	45.750Kg(7.3.22) 47.750Kg(12.1.16)	治療開始後約2ヶ月後 ヨリ水泡音ヲ聴取セズ 其後ハ風邪ノ後ニ僅少 ニ聴クコトアリシモ、 之モ亦次第ニ消失セリ

第 15 例 女、11歳、	約1ヶ月以來盗汗及 37.1—37.2°Cノ微熱 アリ	體格薄弱ナル榮養中等度ノ小ナル女子 レ所見：右側肺上部ニ稍大ナル弱キ癒合性 斑點アリ、左側肺門部附近ニモ之ヲ認ム	昭和9年3月17日— ” 11年5月30日 約2年間 通學ヲ繼續ス
第 16 例 女、16歳、學生	近頃疲レ易ク、夕方毎 日 37.2°C乃至 37.4°C 位ニ上昇スル微熱アリ、 咳嗽、喀痰アリ	體格中等、榮養可良ナル大ナル女子 レ所見：右側肺尖部ニ不規則ナル弱キ大斑點 狀雲翳アリ左側肺尖部ニモ潤濁ヲ認ム、右側 肺ノ上部ヨリ中部ニ互リ多數ノ強弱ノ小斑點 及線狀影像ヲ認メ、左肺上部ニ於テモ輕度ノ 同様ナル所見アリ、線索ハ多ク肺門部ニ向フ	昭和7年10月10日— ” 8年6月17日 約8ヶ月 通學ヲ繼續ス
第 17 例 女、18歳、學生	近來倦怠ヲ感シ、夕方 36.9—37.1°Cノ微熱 アリ	體格中等、榮養可良ナル中等大ノ女子、兩側 肺尖部及鎖骨下部ニ水泡音ヲ聽ク レ所見：右側肺尖部ニ弱キ廣汎性潤濁ヲ認 メ、右肺上部ヨリ中部ニ互リテ弱キ小斑點散 在ス、左側肺尖部ニモ弱キ潤濁アリ、且左肺 上部ニモ多數ノ強弱ノ小斑點ヲ認ム、尙兩側 肺門部ニハ各二三ノ著シク強キ大斑點（石灰 沈著）アリ	昭和7年2月13日— ” 8年1月7日 約1年 通學繼續、受験ノ爲過 度ノ勉強ヲナス
第 18 例 女、18歳、學生	2、3ヶ月以前ヨリ 37.2— 38.0°Cノ發熱、胸痛、 咳嗽及喀痰アリ	體格薄弱、榮養不良ナル貧血性ノ小ナル女子、 右肺上部ヨリ中央部迄多數ノ水泡音ヲ聽ク、 左側後面全體ニモ散在性ニ水泡音ヲ聽取ス、 レ所見：右側上部ハ頗ル著明ナル癒合性雲翳 ニテ充タサレ（氣管枝肺炎性浸潤）、中央ニ 空洞ヲシキモノアリ、左肺尖部ニハ潤濁ヲ認 メ、左肺ノ各所ニ大小強弱ノ斑點散在ス	昭和7年10月10日— ” 8年12月25日 約1年2ヶ月 初メ約1ヶ月缺席セシ モ、8年ヨリ通學、3 月以後ハ家庭ニテ靜養
第 19 例 女、20歳、事務員	約4ヶ月前ニ風邪ニ罹 リテヨリ發熱シ、一時 下降セシモ、近頃再び 朝 36.9—37.0°C、夕方 37.2—37.6°C 位ノ發 熱アリ	體格中等度稍く瘦セタル大ナル女子 レ所見：右側肺ノ殆ンド全領域ニ大小ノ斑點 散在シ、其中ニハ稍く強キ影像ヲ示スモノ多 數アリ、左肺上部ニモ殊ニ肺門部ニ近キ所ニ 強弱ノ小斑點散在ス	昭和10年4月26日— ” 12年2月6日 約2年 數ヶ月勤務ヲ休ミ家庭 ニテ靜養シ、ソノ後ハ 通勤シツ、治療セリ
第 20 例 女、16歳、學生	約8ヶ月以前ヨリ蛋白 尿アリタリト云フ、最 近血尿ヲ排出ス。體溫 ハ最高 37.0—37.6°C 尿意頻數アリ	體格不良、瘦セタル貧血性ノ小ナル女子、頸 腺腫脹、左肺前部ニ時々水泡音ヲ聽取ス、兩 側ノ腎臟ヲ觸知シ得 レ所見：左側肺尖部ヨリ鎖骨下部ニ互リテ、 著明ナル廣汎性潤濁ヲ認ム、右側肺尖部ニモ 弱キ潤濁アリ	昭和11年5月19日— ” 12月4日 約7ヶ月 家庭ニテ臥床セシメ、 1週ニ1回通院
第 21 例 男、22歳、學生	二三ヶ月以來瘦削シ、 近頃咳嗽及微熱（夕方 37.0—37.2°C）アリ	體格榮養共ニ中等度ナル小ナル男子 兩側肺尖部及左鎖骨下部ニ水泡音ヲ聽ク レ所見：左側肺尖部ヨリ鎖骨下部ニ互リ弱キ 斑點狀影像アリ、右側肺尖部ニモ潤濁ヲ認ム	昭和7年1月20日— ” 9年11月26日 約2年半 通學繼續
第 22 例 女、19歳、事務員	最近脊部ニ疼痛アリ、 食慾ナク、體溫ハ夕方 37.0—37.5°Cニ上ル ト云フ	體格中等、榮養可良ナル大ナル女子、右側後 下部ニ僅少ナル水泡音ヲ聽取ス レ所見：右肺ノ肺門部ニ近キ所ヨリ下部ニ互 リテ弱キ小斑點散在ス、左側鎖骨下部ニモ數 多ノ弱キ小斑點ヲ認ム、輕度ノ右側橫隔膜癒 著	昭和11年7月16日— ” 12月29日 5ヶ月 最初2週間缺勤シ、其 後引續キ通勤ス

0.000001(1)0.0000005(6)0.000001(7) 0.000002(1)0.000001(7)0.0000005(4) 0.000001(11)0.000002(4)0.000003(2) 0.000005(2)0.00001(2)0.00002(3) 0.00003(7)0.00005(2)0.0001(3) 0.0002(2)0.0003(4)0.000003(16) 計84回	治療開始後約1ヶ月頃 ヨリタ方 36.6—36.9 Cトナリ、時々37.0C ニ上ル事アリタルモ、 其後次第ニ下降シ、約 2ヶ月後ハタ方36.3 —36.5Cトナリ弛張少 ク、其後再び上昇セズ	21.400Kg(9.3.24) 23.100Kg(9.12.22) 27.400Kg(11.5.30)	
0.0001(3)0.0002(2)0.0001(1) 0.00005(11)0.0001(12) 計29回	治療開始後約2ヶ月頃 ヨリタ方 37.0C 以上 ニ上ル事ナク、ソレヨ リ後モ次第二下降シ、4 ヶ月頃ヨリタ方36.5— 36.6Cノ體溫ヲ示シ、 其後上昇スル事ナシ	41.250Kg(7.10.12) 43Kg(8.5.13)	
0.001(2)0.002(3)0.005(4)0.01(5) 0.02(11)0.001(1)0.01(1)0.02(11) 計38回	治療開始後次第ニ下降 シ、約1ヶ月後ニハタ 方最高 36.7C 位トナ リソノ後ハタ方36.5C 位トナリ一日中ノ動搖 著シク減少セリ	46.800Kg(7.2.20) 52.850Kg(8.1.7)	水泡音ハ減少セシモ、 全ク消失スルニ至ラ ズ、左側肺尖部ニ時々 僅少ニ之ヲ聴取ス
0.0001(11)0.0002(2)0.0001(3) 0.00001(5)0.0001(23)0.0002(9) 0.000001(1) 計54回	通學開始後稍々體溫上 昇セシモ、約半年 後頃ヨリタ方 36.6— 37.8Cニ下降シ、其後 モ引キ續キ同様ナリ	38.250Kg(7.10.14) 40.700Kg(8.12.8)	水泡音ハ次第ニ減少シ 2、3ヶ月後ヨリ時々 之ヲ聴クノミトナリタ ルモ、全然消失スルニ 至ラズ レ所見：右肺上葉ノ影 像著シク限局シ、鎖骨 附近ニ小ナル雲翳ヲ認 ムルノミ
0.000001(3)0.000002(2)0.000005(2) 0.00001(3)0.00002(3)0.00005(1) 0.0001(2)0.0002(2)0.0003(3) 0.0004(2)0.0005(1)0.001(2) 0.002(2)0.003(2)0.004(2)0.005(2) 0.01(3)0.02(3)0.03(11)0.04(3) 計54回	次第ニ下降シ、約5ヶ月 後頃ヨリ多クハ37.0C トナリ時々タ方37.1— 37.2Cニ上リシモ、約 8ヶ月後ヨリ月經ノ前 期ニノミタ方37.0C位 ニ上レリ、約1年後頃ヨ リ毎日タ方最高36.8C ノ動搖少キ熱型ヲ示セ リ	40.300Kg(10.4.29) 41.500Kg(12.2.6)	
0.000001(2)0.000002(2)0.000003(2) 0.000005(2)0.00001(2)0.00002(2) 0.00003(2)0.00005(2)0.0001(2) 0.0002(1)0.00001(1)0.0001(2) 0.0002(1) 計23回	次第ニ解熱シ、約1ヶ 月後ニハタ方 36.7— 36.8C トナリ、時々 37.0C 一上ルノミト ナリタリ。約2ヶ月後 ヨリ最高36.3—36.4C トナリ、一日中ニ於ケ ル動搖著シク減少ス	32.700Kg(11.6.22) 38.700Kg(11.11.30)	間モナク血尿ハ止ミ、 沈渣中ニ僅少ノ赤血球 ヲ認ムルノミトナリ、 他ノ有形成分(上皮、白 血球)モ漸次減少シ、澄 明トナレリ、尿中蛋白 質ハ最初高度ナリシガ 次第ニ減少シテ痕跡ト ナレリ、尿意頻數モ次 第二減少セリ
0.001(3)0.002(2)0.005(4)0.01(6) 0.02(31)0.01(1)0.00001(2)0.001(1) 0.01(3)0.000001(3)0.00001(3) 計59回	治療開始後間モナク最 高 36.5C ノ體溫トナ リ、其後ハ引キ續キ體 溫低ク、一日中ニ於ケ ル動搖著シク減少ス	41.700Kg(7.11.25) 45.600Kg(8.3.6)	1ヶ月後頃ヨリ水泡音 減少シ、時々之ヲ聴取 スルノミトナリタルモ 全然消失スルニ至ラザ リシガ、約1ヶ年後頃 ヨリ引キ續キ全然聴取 セズ
0.000001(3)0.000002(1)0.000003(2) 0.000005(2)0.00001(2)0.00002(2) 0.00003(2)0.00005(2)0.0001(2) 0.0002(2)0.0003(2)0.0005(1) 計23回	次第ニ解熱シ、治療開 始後約3ヶ月頃ヨリ引 キ續キ最高 36.7— 36.8C トナリ、一日中 ニ於ケル動搖モ減少ス	53Kg(11.8.1) 55Kg(11.12.22)	水泡音引キ續キ消失ス

第 23 例 男、21歳、學生	2年前＝腹膜炎＝罹リ、昨年右側ノ肋膜炎＝罹ル。約1ヶ月前ヨリ最高 37.1—37.2°Cノ微熱アリ	體格薄弱、榮養稍く不良ナル大ナル男子、右側後下部打診音短、呼吸音弱 レ所見：兩側肺ノ到ル所ニ弱キ小斑點散在ス 右側鎖骨下ノ側方ニ瀰漫性瀰濁アリ、尙右肺ノ中央部ニ側方ニ向ヘル線索ヲ認ム（葉間癒著）、右側横隔膜ノ強度ノ癒著	昭和9年3月30日— .. 12月19日 約8ヶ月 普通ニ起居ス
第 24 例 男、53歳、官吏	半年前＝風邪ヲヒキ、ソレ以來咳嗽アリ、約2ヶ月前ニ咯血ヲナス、現在咳嗽劇シク、體温夕方 37.0—38.2°Cニシテ不規則ナル發熱アリ	體格不良ナル非常ニ瘦セタル大ナル男子、右側後下部ニ僅少ナル水泡音ヲ聴ク レ所見：左側肺尖部ヨリ鎖骨下ニ互リテ強キ瀰濁ヲ認メ、左肺上部ヨリ多數ノ線索肺門部ニ向フ、右側肺尖部ニモ弱キ雲霧狀影像ヲ認メ、右肺ノ全領域ニ弱キ斑點散在シ、且右側肺門部ノ上方ニハ線索及ビ著明ナル大斑點癒合性ニ存在ス、強度ノ右側横隔膜癒著	昭和11年6月12日— .. 10月5日 約4ヶ月 勤務續行
第 25 例 女、29歳、令嬢	1月程前＝血痰ヲ出シ、多少ノ咳嗽アリ 體温夕方 37.2—37.6°Cニ上ル	體格榮養共ニ中等度ナル小ナル女子、右側肺尖部ニ水泡音アリ レ所見：右側肺尖部ヨリ中央部ニ互リテ無數ノ小斑點稠密性ニ存在シ、殊ニ上部ノ側方ニ於テ著シ、右側肺門部ニハ著明ナル多數ノ大斑點狀影像ヲ認ム、左肺ニモ多數ノ小斑點散在ス、兩側横隔膜癒著	昭和10年8月23日— .. 11年11月13日 約1年3ヶ月 普通ニ起居
第 26 例 女、28歳、令嬢	少女時代＝肋膜炎＝罹ル 約2ヶ月前ヨリ 37.3°C位ノ微熱アリ	體格榮養共ニ中等ナル小ナル女子、兩側肺尖部ニ水泡音ヲ聴ク レ所見：右側肺尖部ヨリ鎖骨下ニ互リテ著明ナル瀰濁ヲ認メ、左側肺尖部ニモ多少ノ瀰濁アリ、兩側横隔膜癒著	昭和9年5月12日— .. 10月27日 約5ヶ月 普通ニ起居ス
第 27 例 男、28歳、店員	數年前肺尖「カタル」ニ罹ル。最近瘦削シ、咳嗽及微熱(夕方 37.0—37.3°C)アリト云フ	體格中等度、稍く瘦セタル中等大ノ男子、右肺後中部ニ水泡音ヲ聴ク レ所見：右側肺尖部ヨリ鎖骨下ニ互リテ廣汎性ニ瀰濁ス、尙右肺上部及ビ肺門部附近ニ弱キ小斑點散在シ、且線索ノ肺門部ニ向ヘルヲ認ム、左側肺上部ニモ少數ノ弱キ小斑點及ビ肺門部ニ向ヘル多數ノ線索ヲ認ム	昭和11年1月23日— .. 5月8日 約5ヶ月 勤務ハ休ミ普通ニ起居ス
第 28 例 男、9歳、	2年前百日咳及麻疹ニ罹リ、ソレ以來多少瘦削セリ、約1ヶ月前ヨリ微熱(夕方 37.2°C位)アリ	體格中等、稍く瘦セタル中等大ノ少年、右側後下部打診音短 レ所見：右側肺門部及其附近ニ稍く著明ナル大小ノ斑點多數ニ存在シ、肺門部ノ輪廓不鮮明ナリ、左側肺門部ヨリ鎖骨下ニ互ル領域ニモ大小ノ弱キ斑點カナリ多數ニ存ス	昭和10年2月25日— .. 12年3月30日 (治療中) 約1ヶ月休校シ、其後ハ通學
第 29 例 女、37歳、公吏妻	著患ナク、突然咯血ヲナス、爾來最高 36.9—37.2°Cノ微熱アリ	體格中等度、瘦セタル中等大ノ女子、右肺前面中央胸骨ニ近キ部ニ水泡音ヲ聴ク、 レ所見：右側肺門部ニ強キ大ナル斑點(石灰沈著)アリ、左ヨリ側方及下部ニ多數ノ強弱ノ小斑點散在シ、肺門部ニ小空洞ト思ハル、影像2アリ、左肺中央部ニモ數多ノ弱キ小斑點ヲ認ム	昭和9年10月18日— .. 12年3月30日 (治療中) 約4ヶ月入院加療、其後ハ自宅ニテ約數ヶ月安靜ニナシ、次テ次第ニ普通ノ起居ニ移ル

0.000001(5)0.000002(2)0.000005(3) 0.00001(2)0.00002(6)0.00005(4) 0.000001(1)0.00001(4)0.00005(1) 計28回	治療開始後次第ニ下降シ、約2ヶ月後ニハ最高 36.8—36.9°C ニナリ、ソノ後益々良好ニシテ引キ續キタ方36.6—36.7°C ノ平熱トナレリ	46.500Kg(9.4.6) 50.600Kg(9.12.19)	
0.000001(2)0.000002(2)0.000003(2) 0.000005(2)0.00001(2)0.00002(2) 0.00003(2)0.00005(1) 計15回	次第ニ下熱シ、1ヶ月後ヨリ引キ續キ平熱トナリ、最高 36.6°C 位ニ止マル	44.400Kg(11.6.29) 44.700Kg(11.10.5)	咳嗽次第ニ減少ス。水泡音ハ約1ヶ月後ヨリ全然聴取セズ
0.000001(3)0.000002(3)0.000003(1) 0.000005(2)0.00001(1)0.000005(1) 0.000001(1)0.000002(1)0.000005(2) 0.000001(1)0.000002(2)0.000003(1) 0.000001(3)0.000002(1)0.000005(1) 0.00001(3)0.000001(1)0.000002(2) 0.000005(1)0.00001(2)0.00002(2) 0.0001(2)0.0002(2)0.0003(2)0.0005(2) 0.001(3)0.00001(1) 計47回	次第ニ下降シ、約2ヶ月後ヨリタ方 36.6—36.8°C トナリ、月經前期ニ多少上昇スル傾向アルノミトナレリ、約1年後ニハ最高36.6—36.7°C 迄ノ平熱トナレリ	47.200Kg(10.9.4) 53Kg(11.11.13)	水泡音ハ約3ヶ月後ヨリ引キ續キ消失セリ
0.000001(5)0.000002(2)0.000003(2) 0.000005(2)0.00001(4)0.00002(2) 計17回	約2ヶ月後頃ヨリ 37.0°C ニ上ル事ナク、其後モ次第ニ下降シ、タ方 36.6—36.8°C トナリ、引キ續キ平熱	45Kg(9.5.14) 47.100Kg(9.10.27)	水泡音ハ完全ニ消失スルニ至ラズ
0.000001(3)0.000002(2)0.000003(2) 0.000005(2)0.00001(2)0.000001(1) 0.00001(1)0.00002(1) 計14回	次第ニ下降シ、治療開始後約1ヶ月頃ヨリタ方 36.6—36.8°C ニナリ時々 37.0°C ニ達スルノミトナリ、3ヶ月後ヨリ引キ續キ平熱トナル	48.400Kg(11.1.27) 45.500Kg(11.5.8)	水泡音消失ス
0.000001(5)0.000002(3)0.000003(3) 0.000005(2)0.00001(2)0.00002(3) 0.00003(4)0.00005(4)0.00001(1) 0.0001(3)0.0002(7)0.00001(1) 0.0001(4)0.0002(3)0.000001(3) 0.000002(2)0.000003(2)0.000005(2) 0.00001(2)0.00002(1)0.00001(1) 0.00002(2)0.00003(2)0.00005(1) 0.0001(2)0.0002(2)0.0003(2)0.0005(1) 0.000001(1)0.0005(2)0.001(2)0.002(3) 0.003(2)0.000001(1)0.003(1)0.005(5) 0.01(2)0.001(1)0.005(3)0.01(5) 計98回(12.3.25)	治療開始後次第ニ下リ、約1ヶ月後ニハ最高 36.4—36.5°C 位トナリ、夫以來引キ續キ平熱ヲ示ス	27.800Kg(10.4.10) 29.300Kg(11.4.29) 33Kg(12.3.4)	レ所見：斑點殆ンド消失シ、肺門部ノ影像限局シテ其輪廓明瞭トナル
喀血ガ止リテ約1ヶ月後ヨリ注射開始 0.000001(3)0.000002(2)0.000003(1) 0.000005(2)0.00001(3)0.00002(2) 0.00005(1)0.00002(1)0.00005(1) 0.0001(2)0.0002(2)0.0003(3)0.0005(1) 0.0003(1)0.0005(1)0.001(3)0.002(1) 0.000001(1)0.001(1)0.002(4)0.003(3) 0.005(1)0.01(2)0.02(5)0.03(1) 0.001(1)0.01(2)0.02(4)0.03(6)0.01(1) 0.000001(2)0.00002(2)0.0001(1) 0.0002(1)0.0003(1)0.0002(2)0.001(1) 0.003(2)0.05(1)0.01(1)0.02(2) 0.03(4)0.04(5)0.05(24) 計114回(12.3.25)	時々殊ニ月經前期ニハタ方 37.0—7.2°C ニ上昇スル微熱ガカナリ續キタルモ、次第ニ下熱シ、約9ヶ月後頃ヨリタ方 36.5—36.7°C トナリ、月經前期ニ於テモ 36.8°C 位ノ體溫ヲ示スニ至リ、1年後頃ニハ最高タ方 36.3—6.4°C 位ノ規則正シキ體溫ヲ示スニ至レリ	56.300Kg(10.2.26) 60.700Kg(10.12.30) 58Kg(12.3.4) S.R. 28mm(9.12.8) 16mm(12.3.18)	風邪ノ後ニ僅カナル血痰ヲ喀出セシ事アルモソノ後ハ全然之ヲ見ズ水泡音モ約半年後頃ヨリ之ヲ聴取セズ レ所見：斑點殆ンド消失シ、空洞ヲ認メズ

第 30 例 [redacted] 女、47歳、教師	1 月程前ニ風邪ニ罹リ夫以來微熱アリ (37.2°C 位) 咳嗽、喀痰アリ	體格中等度、榮養中等ナル貧血性ノ小ナル女子、右肺全部ニ散在性ニ水泡音アリ、左肺尖部ニモ之ヲ聽ク レ所見：兩側肺上部ニ弱キ小斑點散在シ、多數ノ線索肺門部ニ向フ、右側肺門部著明、側橫隔膜癒著	昭和 9 年 4 月 17 日— „ 11 年 12 月 25 日 約 1 年半 約 1 ヶ月缺勤シ、其後勤務
第 31 例 [redacted] 女、16歳、學生	近頃 37.3°C 位ノ微熱アリ	體格榮養共ニ中等度ノ貧血性ノ中等大ナル女子 レ所見：兩側肺門部ニ影像擴大ス、兩側肺上部ニ弱キ小斑點散在ス	昭和 9 年 10 月 13 日— „ 12 年 3 月 30 日 (治療中) 1 ヶ月休ミ後通學續行
第 32 例 [redacted] 女、32歳、公吏妻	7 年前ニ兩側滲出性肋膜炎ニ罹ル、最近 37.5—7.6°C ノ微熱アリ	體格中等瘦セタル中等大ノ女子、兩側肺尖部及右側肺門部ニ水泡音ヲ聽ク レ所見：兩側肺尖部ニ弱キ雲翳狀影像アリ、右側肺ノ全領域ニ弱キ小斑點散在ス、右肺門部ノ影像著明ナリ、右側橫隔膜癒著	昭和 9 年 3 月 28 日— „ 12 年 3 月 30 日 (治療中) 普通ニ起居ス
第 33 例 [redacted] 男、21歳、店員	20 日前ニ突然咯血ヲナス、體溫ハ時々夕方 37.0—37.2°C 一上昇ス	體格中等度、稍々瘦セタル大ナル男子、左側肺尖部及前面ニ時々水泡音ヲ聽取ス、右側下部ニハ時々乾性水泡音現ハル レ所見：兩側肺尖部(殊ニ左側)ハ瀰漫性ニ潤濁セリ、兩側肺ノ全面ニ弱キ小斑點散在シ、且ツ數多ノ線索肺門部ニ向フ左側肺門部附近ニ空洞アリ、兩側橫隔膜癒著	昭和 9 年 7 月 27 日— „ 10 年 12 月 6 日 約 1 年半 普通ニ起居、約半年後ヨリ勤務ス
第 34 例 [redacted] 女、18歳、學生	10 歳ノ折肺炎ニ罹リ、12 歳ノ時 1 ヶ月程原因不明ノ高熱續キタリ、1 年來 37.2—7.3°C ノ微熱アリ、食慾不振ヲ訴フ	體格中等、榮養可良ナル大ナル女子、兩側肺尖部ニ水泡音アリ レ所見：兩側肺ノ全領域ニ強弱大小ノ斑點多數ニ散在ス	昭和 7 年 7 月 9 日— „ 8 年 5 月 13 日 約 10 ヶ月 通學繼續
第 35 例 [redacted] 女、18歳、學生	1 年以來瘦削シ、疲レ易シ、約 1 ヶ月以來 37.1—7.2°C ノ微熱アリ、心悸亢進シ易シ	體格中等度、稍々瘦セタル中等大ノ女子 レ所見：右側肺上部ニ著明ナル大小ノ斑點多數ニ存在シ、中部及下部ニモ弱キ小斑點ヲ多數ニ認ム、兩側肺尖部(殊ニ右側)ハ擴汎性ニ潤濁ス、輕度ノ兩側橫隔膜癒著	昭和 10 年 1 月 15 日— „ 7 月 27 日 約 半ヶ年 通學繼續

0.000001(3)0.000002(4)0.000003(4) 0.000001(2)0.000002(3)0.000003(1) 0.000005(1)0.000001(3)0.000002(2) 0.000003(1)0.000005(2)0.0001(1) 0.0002(1)0.002(2)0.003(2)0.005(2) 0.01(3)0.02(2)0.03(2)0.04(1)0.03(7) 0.04(4)0.000001(1)0.00001(1) 0.00002(1)0.00003(2)0.0003(1) 0.0004(2)0.0005(3)0.001(2)0.002(2) 0.003(3)0.02(3)0.03(10)0.04(1) 0.05(3)0.01(1)0.05(2) 計91回	次第ニ下降シ、約半年 頃ヨリ夕方 36.5— 36.7°C ニシテ引キ續 キ同様ニ平熱ナリ	45.450Kg(9.5.15) 52Kg(11.11.17)	水泡音次第ニ減少シ、 約半年後頃ヨリ時々過 勞ノ後ニ之ヲ右肺尖部 及中央部ニ僅少ニ聽キ シモ、遂ニ引キ續キ消 失ス レ所見：小斑點及線索 ヲ殆ンド認メズ
0.000001(2)0.000002(2)0.000003(2) 0.000005(2)0.000001(1)0.00002(2) 0.00003(2)0.00005(2)0.0001(2) 0.0002(2)0.0003(1)0.0005(2)0.001(2) 0.002(2)0.003(2)0.005(2)0.01(3) 0.02(2)0.03(3)0.04(1)0.03(1)0.04(11) 0.05(10)0.01(1)0.05(4)0.02(1)0.03(3) 0.04(3)0.05(3) 計76回(12.3.30)	次第ニ解熱シ、3ヶ月 後ヨリ 37.0°C 以上ニ 上ル事ナク、5ヶ月後頃 ヨリ夕方 36.6—36.8°C ニナリ、其後引キ續キ 平熱ナリ	46.200Kg(9.10.16) 46.300Kg(12.3.2) S.R. 24mm(12.3.30)	レ所見：肺門部ノ影像 縮小シ、其輪廓明瞭ト ナル、兩側肺上部ヨリ 多数ノ線索肺門部ニ向 フ
0.000.01(2)0.000002(1)0.000001(5) 0.000002(5)0.000005(3)0.00001(5) 0.00002(2)0.000001(1)0.000002(1) 0.00001(2)0.00002(3)0.00003(1) 0.000001(1)0.00001(3)0.00002(2) 0.0005(2)0.001(1)0.000001(1) 0.0001(1)0.000001(1)0.0001(4) 0.0005(1)0.001(3)0.002(1)0.001(1) 0.002(2)0.003(2)0.005(2)0.01(3) 0.02(12)0.01(2)0.02(7)0.000001(2) 0.001(1)0.01(3)0.0001(1)0.001(1) 0.003(1)0.005(1)0.000001(1)0.0001(1) 0.001(1)0.002(1)0.005(1)0.01(1) 0.02(5)0.03(2)0.000001(1)0.01(1) 0.001(2)0.01(2)0.02(2)0.03(24) 0.001(1)0.01(1)0.03(2) 計142回(12.3.25)	2ヶ月後ヨリ夕方 37.0 °C 以上ニ上ル事ナシ、 但シ月経前ニハ 37.0°C 位トナル、半年後頃ヨ リ引キ續キ平熱ニシテ 月経前ニモ 36.7— 36.8°C ナリ	45.700Kg(9.4.26) 45.500Kg(12.3.4)	約3ヶ月後頃ヨリ水泡 音次第ニ減少シ、1年 後頃ヨリ過勞ノ後ニ僅 少ニ聽クノミトナリ、 1ヶ半年頃ヨリ全然聽 取セズ、 レ所見：右側肺尖部雲 翳消失シ、其他ノ領域 ニ於テハ少数ノ強キ小 斑點ヲ認ムルノミ、右 側肺門部ノ影像限局ス
0.000001(4)0.000002(4)0.000001(1) 0.000005(2)0.000001(1)0.000005(1) 0.000001(1)0.000005(3)0.00001(5) 0.00002(2)0.00005(1)0.0001(1) 0.00001(1)0.000001(2)0.0001(2) 0.0002(2)0.0003(2)0.0005(3)0.001(2) 0.002(3)0.003(2)0.005(2)0.01(1) 0.0001(1)0.001(1)0.005(1)0.01(2)0.02(4) 計57回	次第ニ下降シ、1ヶ月後 頃ハ夕方 36.6—36.8°C ニナリ、時々 37.0°C 位 ニナル事アリ、約5ヶ 月後頃ヨリ最高 36.5— 36.6°C ノ規則正シキ體 溫ヲ示シ、上昇スル事 ナシ	48.200Kg(9.7.30) 53.100Kg(10.12.6)	3ヶ月後頃ヨリ引キ續 キ水泡音ヲ聽取セズ。 レ所見：斑點減少ス
0.001(2)0.002(4)0.003(2)0.005(2) 0.01(4)0.02(9)0.002(1)0.01(9)0.02(1) 計34回	次第ニ下降シ、4ヶ月 後頃ニハ夕方 36.6— 36.8°C トナリ、時々 36.9—37.0°C 以上ル ノミトナリ、半年後ニ ハ最高 36.6—36.8°C トナリ爾來平熱續ク	50.500Kg(7.7.9) 54.100Kg(8.5.13)	水泡音次第ニ減少シ、 時々之ヲ聽クノミトナ リ、約3ヶ月ヨリハ全 然聽取セズ
0.000001(1)0.000002(2)0.000001(2) 0.000002(2)0.000003(1)0.00001(1) 0.00002(1)0.00003(2)0.00005(1) 0.0001(2)0.0002(3)0.0003(2)0.0005(2) 0.001(2)0.002(1) 計25回	月経前ニハ多少高キ體 溫ヲ示センガ、治療開 始後約2ヶ月頃ハ夕方 36.6—36.7°C トナリ、 約半年後ハ夕方 36.3— 36.5°C ノ規則正シキ 體溫ヲ示ス	45.300Kg(10.1.19) 45.600Kg(10.7.27)	

第 36 例 [redacted] 女、19歳、事務員	近頃胸痛ヲ覺エ、肩ノ凝リヲ訴フ、且ツ微熱(夕方 37.0—37.3C)アリ	體格榮養共ニ中等度ノ中等大ノ女子、右肺前面中央部胸骨ニ近キ部ニ水泡音ヲキク、右側後面下部ニモ之ヲ聽ク レ所見：右側肺尖部(竝ビニ左側モ輕度ニ)潤濁ス、兩側肺ノ各所ニ強弱ノ小斑點散在シ、右側肺門部ノ影像著明ナリ	昭和8年6月23日— ,, 12年3月30日 (治療中) 勤務續行
第 37 例 [redacted] 女、22歳、令嬢	昨年12月及本年1月ニカナリ多量ノ咯血ヲナセリ。2ヶ月以來38.0C程度ノ發熱アリ、咳嗽、咯痰甚シク、食慾、睡眠共ニ不十分ナリ	體格榮養共ニ不良ナル大ナル女子、左肺前後面打診音短、左側全部ニ多數ノ水泡音ヲキク、咯痰中結核菌強陽性 レ所見：左側肺ノ中央部ヨリ下部ニ互ル領域ハ著明ナル雲翳ニテ充タサル(氣管枝肺炎性浸潤)、上部ニハ不規則ナル弱キ小斑點稠密シテ存在シ、心臟ハ左側ニ牽引セララル、右肺ノ全領域ニハ多數ノ弱キ小斑點播布セリ	昭和7年9月3日— ,, 8年7月26日 約10ヶ月 入院不能ノ爲自宅ニテ臥牀、通院加療
第 38 例 [redacted] 女、24歳、令嬢	約1ヶ月程前ヨリ胸痛アリ、體溫ハ夕方36.9—37.2C 位ナリ	體格榮養共ニ中等度ナル小ナル女子、右側肺尖部ニ僅少ノ水泡音ヲ聽ク レ所見：兩側肺ノ全領域ニ弱キ小斑點多數ニ散在シ、肺門部附近ニハ數多ノ稍々大ナル強斑點ヲ認ム	昭和8年4月1日— ,, 9年11月25日 約1年8ヶ月 普通ニ起居ス
第 39 例 [redacted] 女、14歳、學生	3ヶ月以前ニ1月程高熱アリタリ、現在ハ夕方 37.0—37.3C ノ微熱アリ	體格榮養共ニ中等度ナル小ナル女子、兩側肺尖部ニ水泡音アリ レ所見：兩側(殊ニ右側)肺尖部ハ擴汎性ニ潤濁シ、右肺上部(殊ニ肺門部ニ寄リタル部分)ニ多數ノ弱キ小斑點アリ、其部分ヨリ數多ノ線索肺門部ニ入ル、左肺ニモ輕度ナル同様ノ像アリ、右側肺門部ノ影像著明ナリ、左側肺門部ニハ著明ナル大斑點2アリ、右側橫隔膜癒著	昭和9年2月19日— ,, 12年3月30日 (治療中) 通學續行
第 40 例 [redacted] 女、35歳、教師	7年前ニ右肺尖「カタル」ニ罹ル、10ヶ月程前ニ右側滲出性肋膜炎ヲ病ム、夫以來微熱(37.2—37.3C)アリ	體格榮養共ニ不良ナル中等大ノ女子、右側後下部打診音短、左側上部ヨリ中央部ニ水泡音ヲ聽ク レ所見：右肺ノ全領域ニ互リテ無數ノ弱キ小斑點播布セラレ(血行性播種)、肺尖部ヨリ鎖骨下ノ側方ニ互リテ著明ナル瀰漫性雲翳ヲ認ム、左肺ニモ肺尖部ヨリ下部ニ至ル迄全領域ニ弱キ小斑點多數ニ存在ス、右側肺ノ側方ニハ一樣ナル擴汎性影像(肋膜炎後)ヲ認ム	昭和10年1月25日— ,, 12年3月30日 (治療中) 勤務續行

B. 入院患者

第 41 例 [redacted] 男、51歳、學者	約25年前肺尖「カタル」ニ罹ル、近頃疲レ易ク時々血痰ヲ出シ、發熱ス、咳嗽及咯痰アリ	體格薄弱、榮養中等ナル中等大ノ男子、右肺下部ニ水泡音ヲ聽ク、咯痰中結核菌陽性 レ所見：右側肺尖部ヨリ鎖骨下部ニ互リテ著明ナル擴汎性潤濁アリ、左側肺尖部モ潤濁セリ、右側肺ノ上方ヨリ下方ニ互リ全般的ニ大小ノ稍々著明ナル斑點多數ニ散在ス、右側肺門部著明ニシテ其側方(下葉尖端)ニ空洞ヲ認ム、左側肺門部ノ附近ニモ大小ノ斑點數多アリ、著明ナル右側橫隔膜癒著	昭和9年9月21日— ,, 10年5月2日 約8ヶ月
----------------------------------	---	--	----------------------------------

0.00001(3)0.00005(4)0.00001(1) 0.00005(3)0.0001(5)0.0002(1)0.001(3) 0.00001(1)0.0001(2)0.000001(1) 0.0001(2)0.0002(5)0.00002(4) 0.00003(4)0.000001(1)0.000002(2) 0.000001(3)0.000002(3)0.000003(2) 0.00001(5)0.00002(5)0.00005(2) 0.0001(5)0.0002(4)0.0003(2)0.005(1) 0.01(2)0.02(3)0.03(2)0.01(1) 0.02(1)0.03(23)0.04(5) 計129回(12.3.27)	次第＝下降シ、約2ヶ月後ハ最高大凡ソタ方36.5—36.°6C トナリ、其後モ同様ニ平熱トナル	46.200Kg(8.6.26) 45.500Kg(11.12.19)	約2ヶ月後頃ヨリ引キ續キ水泡音消失セリ
0.00005(5)0.0001(1)0.00005(7) 0.00001(2)0.00005(23)0.000001(1) 0.000005(2) 計41回	漸次＝下降シ、1ヶ月半頃ヨリ時々37.4—37.°5C乃至38.°C位ニ發熱スルノミトナリ、約半ヶ月後頃ヨリタ方36.°7C 位ニシテ時トシテ37.°0Cニ上ルノミトナレリ	45.750Kg(7.9.7) 44.500Kg(8.7.26)	左肺ノ多數ノ水泡音ハ漸次ニ減少シ、約半年後ハ僅少ニ聴クノミトナリシモ、全然消失スルニ至ラズ、咳嗽喀痰モ多少減少セリ。 レ所見：左側ノ雲翳ハ大斑點狀トナリ、右側ノ斑點モ著シタ減少セリ
0.0001(2)0.0002(4)0.0005(4)0.001(4) 0.0001(2)0.0005(1)0.0001(2)0.0002(3) 0.0005(2)0.001(3)0.002(3)0.005(2) 計32回	約1ヶ月後頃ヨリ最高33.3—36.°4C ノ規則正シキ體溫ヲ示シ、其後上昇セズ	44.100Kg(8.4.5) 41.700Kg(9.11.25)	水泡音ハ間モナク消失セリ
0.000001(14)0.000002(4)0.000003(4) 0.000005(6)0.00001(2)0.00002(4) 0.00005(1)0.0001(2)0.0002(2) 0.0005(1)0.001(2)0.002(2)0.003(4) 0.01(2)0.02(4)0.03(13)0.02(2) 0.03(11)0.02(2)0.000005(1)0.02(1) 0.03(2)0.02(4)0.03(4)0.05(14) 計108回(12.3.27)	漸次＝下降シ、5ヶ月後ハ最高タ方36.6—36.°7C ノ規則正シキ體溫ヲ示セリ	36.200Kg(9.2.19) 42.500Kg(12.2.27) S.R. 38mm(10.12.5) 10mm(11.12.5) 6mm(12.3.27)	水泡音ハ減少セリ レ所見：小斑點消失シ線索ノ肺門部ニ向フラ見ル
0.00001(1)0.00002(1)0.000001(2) 0.000002(3)0.000005(3)0.00001(3) 0.00002(3)0.00005(3)0.0001(2) 0.0002(3)0.00001(1)0.00001(1) 0.0002(3)0.0003(3)0.0005(1)0.005(2) 0.01(2)0.000001(2)0.001(1)0.002(2) 0.003(2)0.004(2)0.005(1)0.01(2) 0.02(5)0.03(7)0.05(2)0.02(1)0.05(2) 0.00005(1)0.05(8)0.000001(1) 0.000002(1)0.01(2) 計79回(12.2.27)	次第＝下降シ、2ヶ月後頃ヨリタ方36.°7C 位ノ體溫ヲ示シ、時々37.°0Cニ上ルノミトナレリ、4ヶ月後頃ヨリ毎日引キ續キタ方36.5—36.°7C ノ體溫ヲ示シ、爾來平熱持續ス	41.200Kg(10.2.4) 42.400Kg(12.2.27)	約1ヶ月後ニハ水泡音ヲ聴取セズ、タゞ風邪ノ後ニ僅ニ之ヲ聴クノミトナリ、3—4ヶ月後ヨリハ全ク消失セリ。 レ所見：右側ニ於テハ肺尖部竝ビニ其他ノ領域ニ於ケル影像ハ殆んど全ク消失シ、左側ニ於テ僅ニ斑點ノ痕跡ヲ認ムルノミ

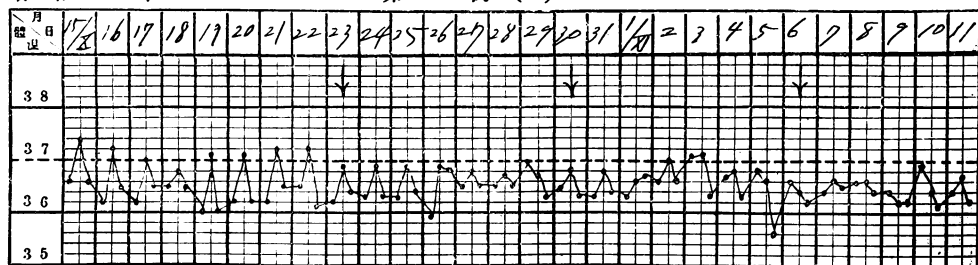
0.000001(3)0.000002(2)0.000001(3) 0.000002(2)0.000005(2)0.00001(3) 0.0001(1)0.0002(1)0.0005(1)0.001(1) 0.002(1)0.005(1)0.01(1)0.02(2) 0.03(2)0.04(2)0.05(3) 計31回	不規則ニ時々發熱セシガ、漸次下降シ、入院後5ヶ月頃ヨリハ發熱スル事ナク、規則正シキ弛張少キ體溫ヲ示シ、其後モ引キ續キ上昇セズ	45.900Kg(9.9.28) 47Kg(9.11.11) 49.400Kg(10.3.24) S.R. 35mm(9.12.14) 22mm(10.3.10)	咳嗽、喀痰次第ニ減少シ、血痰ハヤミ、水泡音消失ス。 レ所見：右側竝ビニ左側肺ノ斑點減少シ、或ルモノハ輪廓明瞭トナル
---	--	---	--

第 42 例 [redacted] 女、25歳、令嬢	2年前血痰アリ、ソノ頃ヨリ微熱アリシガ、半年程前ヨリ 38.5°C 迄ノ發熱、咳嗽及咯痰アリ、食慾不振、瘦削ス	體格不良、瘦セタル小ナル女子。右側肺上部及中央部並ビニ左側肺上部ヨリ中央部ニ互リテ多數ノ水泡音ヲ聴取ス、喀痰中結核菌多數、レ所見：左肺ノ上部ヨリ中部ニ至ル迄ノ部分ハ著明ナル雲翳ヲ以テ充サレ、殊ニ中部ニ於テ高度ニシテ(氣管枝肺炎性浸潤)、其中ニ空洞ト思ハルハ所アリ、右肺ニモ亦全領域ニ互リ無數ノ著明ナル小斑點密集シテ存在シ殊ニ上方ニ於テ稠密ナリ	昭和8年10月1日— ,, 12年3月30日 (治療中)
第 43 例 [redacted] 女、23歳、令嬢	2年程前ヨリ微熱(最高37.2—37.7°C)アリ、胸痛及咳嗽アリ	體格不良ナル瘦セタル小ナル女子、兩側肺尖部ニ水泡音ヲ聴ク レ所見：右肺ノ全領域ニ弱キ小斑點散在シ、且左肺ノ各所ニモ稍々強キ小斑點アリ、右側肺門部ノ影像著明ナリ、右側肺尖部及ビ左側肺尖部ヨリ鎖骨下部ニ互リテ弱キ擴汎性浸潤ヲ認ム	昭和8年11月17日— ,, 10年1月21日 退院 其後現在ニ至ル迄外來ニテ治療
第 44 例 [redacted] 男、23歳、學生	約4月前ヨリ最高37.3°Cノ微熱アリ	體格榮養共ニ不良ナル中等大ノ男子、右側後下部呼吸音弱 レ所見：兩側肺ノ各所ニ弱キ小斑點散在シ、殊ニ下部ニ多シ、左側肺尖部ハ浸潤セリ、右側横隔膜癒著	昭和8年11月6日外來 ,, 9年1月12日入院 ,, 6月19日退院 其後11年7月2日迄外來、10年4月ヨリ通學續行
第 45 例 [redacted] 男、18歳、學生	1ヶ月程前ヨリ左側胸痛アリ體溫最高37.0—37.2°C	體格薄弱、瘦セタル大ナル男子、兩側肺尖部ニ時々水泡音ヲ聴ク、兩側後下部ニ摩擦音アリ レ所見(10.3.27)：兩側肺ノ各所(殊ニ右肺ノ中央部)ニ數多ノ小斑點ヲ認ム、兩側肺上部ヨリ數多ノ線索肺門部ニ向フ、右側肺門部ノ影像著明ナリ、兩側肺尖部(殊ニ左側)ハ浸潤ス	昭和10年1月25日— ,, 11月5日 約10ヶ月
第 46 例 [redacted] 女、22歳、令嬢	3年前ニ肋膜炎ニ罹ル、2週間前ヨリ微熱(最高37.9°C)アルニ氣ヅキタリ	體格榮養共ニ中等ナル中等大ノ女子、右側後上部ニ水泡音ヲ聴ク	昭和7年8月2日— ,, 8月30日退院 其後8年1月5日迄外來

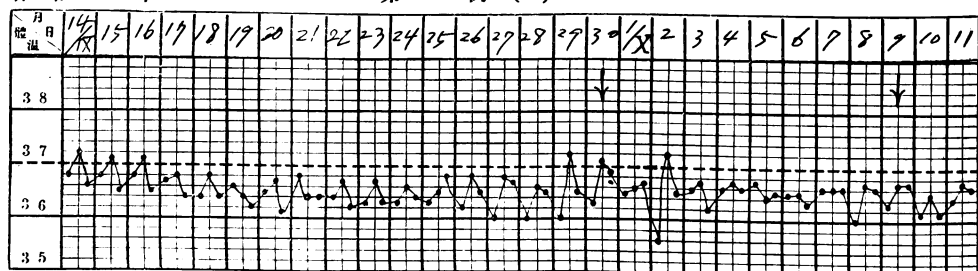
0.000001(54)0.000002(5)0.000003(4) 0.000005(2)0.00001(3)0.00002(2) 0.00003(2)0.00005(2)0.0001(4) 0.0002(1)0.0003(2)0.0005(2)0.001(2) 0.002(2)0.003(2)0.005(2)0.01(3) 0.02(3)0.03(3)0.04(6)0.05(5) 0.000001(1)0.00001(1)0.01(1)0.02(1) 0.03(1)0.04(4)0.05(57) 計177回(12.3.29)	次第ニ下熱シ、入院後 5ヶ月頃ヨリ最高37.0 Cトナリ、1ヶ月頃ヨ リ最高36.7C位トナ リ、2年後頃ヨリ引き 續キ規則正シキ正常體 溫ヲ示スニ至レリ	36.250Kg(8.9.26) 44Kg(9.8.15) 52.700Kg(10.7.17) 60Kg(11.7.1) 59.600Kg(12.3.6) S.R. 140mm(8.12.23) 120mm(9.1.23) 60mm(9.6.22) 10mm(10.5.26) 4mm(11.4.19)	入院後約2ヶ月頃ヨリ 水泡音ハ右側前下部ニ ノミ限局シテ聴取ス。 其後次第ニ僅少トナリ 現在ハ殆ンド消失セリ 咳嗽ハ半ヶ年後頃ヨリ 止ミ、喀痰ハ入院後8 ヶ月頃ヨリ朝ノ外殆ン ド消失セリ、冬季モ風 邪ニ罹ラズ、9年12月 頃ヨリ引き續キ喀痰中 ニ結核菌ヲ認メズ、 レ所見：右肺ノ斑點著 シク減少シテ限局性ト ナレリ、左肺中部ノ影 像モ著シク限局シ其中 ニ空洞ヲ認メズ
0.00001(3)0.000001(5)0.00002(1) 0.000001(3)0.000002(8)0.000003(9) 0.000005(2)0.00001(2)0.00002(2) 0.00003(3)0.00005(2)0.0001(5) 0.0002(4)0.0003(3)0.0005(2)0.001(2) 0.000001(1)0.0001(1)0.001(1)0.002(1) 0.003(1)0.002(1)0.003(1)0.001(2) 0.002(7)0.0001(1)0.002(1)0.003(1) 0.0001(2)0.001(1)0.002(2)0.003(2) 0.005(2)0.001(1)0.002(2)0.003(2) 0.005(2)0.01(2)0.02(4)0.03(3) 0.0003(2)0.0005(2)0.001(2)0.002(1) 0.003(2)0.005(2)0.01(2)0.02(2) 0.03(3)0.04(2)0.05(1)0.000001(1) 0.01(2)0.02(1)0.03(2)0.04(5) 0.0001(1)0.01(1)0.03(2)0.04(3) 0.05(2) 計141回(12.3.3)	入院後半年頃ヨリタ方 37.0C以上ニ上昇ス ル事ナク、最高36.8C ヲ示シ、月經前ニハ多 少上昇ノ傾向アリ、夫 ヨリ數ヶ月後ニハ月經 前ニモ平溫ヲ示スニ至 レリ、其後引續キ上昇 スル事ナシ	42.90Kg(9.1.9) 43.600Kg(9.8.3) 45.100Kg(9.9.28) S.R. 4mm(8.11.12) 2mm(9.7.25)	水泡音ハ治療開始後間 モナク消失シ、其後聴 取セズ、 レ所見：兩側肺炎部竝 ビニ右肺ノ小斑點殆ン ド消失ス
0.0001(1)0.00001(3)0.00002(2) 0.000001(3)0.000005(2)0.00001(2) 0.00002(2)0.00005(1)0.00001(1) 0.00002(1)0.00001(1)0.000001(4) 0.000002(1)0.000005(2)0.00001(5) 0.00002(1)0.00005(1)0.001(1)0.002(2) 0.005(1)0.01(2)0.02(3)0.03(5)0.04(2) 0.05(2)0.03(1)0.05(3)0.04(1)0.02(1) 0.03(1)0.000001(1)0.001(1)0.00001(1) 0.001(1)0.01(1)0.02(2)0.000001(1) 計66回	入院後3ヶ月頃ヨリ 引き續キタ方36.5— 36.6Cトナリ、其後モ 引き續キ規則正シキ體 溫ヲ示セリ	52.300Kg(9.1.12) 61Kg(9.6.18) 60.600Kg(11.6.18)	レ所見：小斑點著シク 減少ス
0.000001(1)0.000002(1)0.000005(1) 0.00001(2)0.00002(3)0.00003(2) 0.00005(2)0.0001(3)0.0002(1) 0.0003(2)0.0005(2)0.001(2)0.002(3) 0.003(2)0.005(3)0.01(3)0.02(4) 計37回	治療開始後間モナク正 常體溫トナリ、最高 36.7Cヲ示セリ、數ヶ 月後ニハ最高36.5— 36.6Cトナリ、引き續 キ規則正シキ體溫ヲ示 セリ	43.400Kg(10.5.9) 45.800Kg(10.10.26) S.R. 35mm(10.5.26) 20mm(10.10.26)	肺炎部ノ水泡音及摩擦 音次第ニ消失セリ、尙 右側中央部ニ水泡音出 現セシ事アリシモ、之 モ亦消失セリ、 レ所見：斑點ノ大部分 消失シ、各方面ヨリ線 索ノ肺門部ニ向フヲ見 ル、右側肺門部ノ影像 限局ス
0.001(3)0.002(3)0.003(2)0.005(3) 0.01(5)0.02(5) 計21回	入院後2週間頃ヨリタ 方36.6Cトナリ、其 後モ引き續キ弛張少ナ キ體溫ヲ示セリ	42.300Kg(7.8.13) 46.800Kg(7.12.24)	治療開始後間モナク水 泡音消失セリ

第 47 例 女、24歳、令嬢	4ヶ月前ヨリ咳嗽、喀痰激シク微熱 (37.0—37.2°C) アリ	體格、榮養共ニ不良ナル大ナル女子、右肺上部及下部並ビニ左肺中央ヨリ下部ニ多數ノ水泡音ヲ聴ク、喀痰中結核菌陽性 レ所見：左肺ノ上部ヨリ中部ニ互リテ規則ナル大小ノ斑點癒合性ニ密集シテ存在シ、鎖骨下部ニ於テ最モ著明ナリ、肺尖部モ斑點ニテ充タサル、右肺ニ於テハ肺尖部ヨリ下方ニ至ル迄全領域ニ互リテ弱キ多數ノ小斑點存在ス、左右横隔膜ノ輕度ノ癒著	昭和10年6月10日— „ 11年5月13日退院 其後外來12年3月30日 (治療中)
第 48 例 男、16歳、學生	昨年頃ヨリ貧血トナリ胃腸障礙ヲ覺エ、微熱 (37.1—37.2°C) アリ、近來瘦削ス	體格榮養共ニ不良ナル中等大ノ少年、兩側肺上部ニ前後方ヨリ水泡音ヲ聴ク	昭和7年10月4日— „ 8年3月3日 5ヶ月
第 49 例 女、19歳、令嬢	約1ヶ月前ヨリ微熱 (夕方 37.2—37.3°C) アリ	體格榮養共ニ中等ナル大ナル女子 レ所見：右側肺尖部ヨリ鎖骨下ノ側方ニ互リテ弱キ擴汎性ノ溷濁アリ、左側肺尖部モ擴汎性ニ弱キ雲霧ヲ認ム、此他兩側肺ノ各所ニ弱キ小斑點散在シ、殊ニ肺門部附近ノモノハ強キ小斑點ヲナス	昭和8年3月29日— „ 7月10日外來 昭和9年2月9日入院 „ 10年4月1日退院 其後10年11月11日迄外來
第 50 例 男、15歳、學生	8歳ノ時肺炎ニ罹ル、約1ヶ月前ヨリ最高 37.2—37.3°C ノ微熱アリ。父ハ肺結核ニテ死亡セリ	體格榮養共ニ不良ナル大ナル少年 レ所見：右側肺ノ各所ニ多數ノ弱キ小斑點散在シ、左側ニモ多少存在ス、兩側、殊ニ左側肺尖部ニ溷濁ヲ認ム、兩側肺門部ノ影像著明ナリ	昭和8年11月23日— „ 9年3月1日退院 其後10年7月27日迄外來

昭和 9 年 第 1 例 (a)



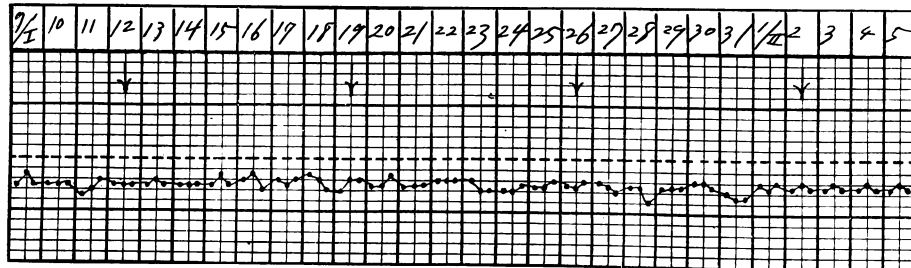
昭和 11 年 第 2 例 (a)



0.000001(3)0.000002(3)0.000003(2) 0.000005(2)0.00001(2)0.00002(2) 0.00003(2)0.00004(3)0.00005(2) 0.0001(1)0.0002(1)0.0003(2)0.0004(2) 0.0005(2)0.001(1)0.002(2)0.003(2) 0.004(2)0.005(2)0.01(2)0.02(2) 0.03(2)0.05(26)0.01(1)0.05(1)0.01(1) 0.05(7)0.01(1)0.05(7)0.000001(1) 0.05(1) 計90回(12.3.31)	入院後1ヶ月頃ヨリ最 高夕方 36.7—36.°C, 時々 37.°Cニ達スル ノミトナリ、尙次第ニ 下降シ、4ヶ月後ヨリ 朝 36.°C 夕方 36.5— 36.°Cニシテ、其後モ 引キ續キ弛張少キ定型 的ノ體溫ヲ示セリ	43Kg(10.7.19) 50.300Kg(11.5.13) S.R. 62mm(10.8.1) 35mm(10.10.13) 32mm(11.2.22) 12mm(11.4.20)	多數ニ聽取セシ水泡音 ハ次第ニ減少シ、約9ヶ 月後ヨリハ引キ續キ全 然聽取セザルニ至ル、咳 嗽喀痰減少シ、體重増 加著シク元氣恢復セリ レ所見：左肺ノ影像著 シク限局シ、右肺ノ斑 點モ亦大部分消失シ、 線索ノ肺門部ニ向ヘル ヲ認ム
0.0001(3)0.0002(2)0.00005(1) 0.0001(4)0.0002(4)0.0003(2) 計16回	入院後1ヶ月半頃ヨリ 最高36.°8C 位トナリ、 其後益々良好ニシテ最 高 36.5—36.°6Cノ平 熱ヲ示シ、引キ續キ同 様ナリ	40.500Kg(7.10.7) 45.900Kg(7.12.28)	
0.0001(5)0.00001(3)0.0001(1) 0.00001(2)0.0001(2)0.00001(2) 0.000001(10)0.000002(4)0.000003(1) 0.000005(1)0.00001(1)0.00002(3) 0.00003(2)0.00005(3)0.0001(8) 0.0002(1)0.000001(2)0.00001(2) 0.0001(1)0.000001(5)0.000002(2) 0.00001(2)0.00002(1)0.00005(1) 0.0001(2)0.0002(2)0.0003(3)0.0005(8) 0.001(3)0.002(3)0.000001(1)0.002(1) 0.001(1)0.002(2)0.003(2)0.005(2) 0.01(3)0.02(1)0.000001(1)0.0001(1) 0.01(1) 計102回	入院後2ヶ月頃ヨリ夕 方 37.°Cニ達スル事 ナク、3ヶ月頃ヨリ最 高 36.6—36.°8Cノ平 熱ヲ示シ、其後モ引キ 續キ同様ナリ	46.800Kg(9.2.11) 53.400Kg(9.11.12)	レ所見：肺尖部ノ潤濁 殆ンド消失シ、其他ノ 部ノ影像モ殆ンド認メ ザルニ至レリ
0.000001(2)0.000005(3)0.00001(3) 0.00002(2)0.00005(2)0.0001(2) 0.0001(13)0.0002(6)0.0005(4) 0.000001(3)0.0001(2)0.000001(1) 0.00001(1) 0.0001(2)0.0002(2)0.00001(2) 0.0005(2)0.001(2)0.002(3)0.00001(1) 0.0001(1)0.000001(1)0.000005(1) 0.00001(1)0.00002(3)0.00005(1) 0.00001(2) 計69回	入院後2ヶ月頃ヨリ最 高 36.6—36.°8Cトナ リ其後モ引キ續キ同様 平熱ナリ	37.350Kg(8.11.24) 41.050Kg(9.1.22) 43.200Kg(9.3.5) 46.800Kg(10.7.22)	レ所見：斑點著シク減 少シ、肺門部ノ影像限 局ス

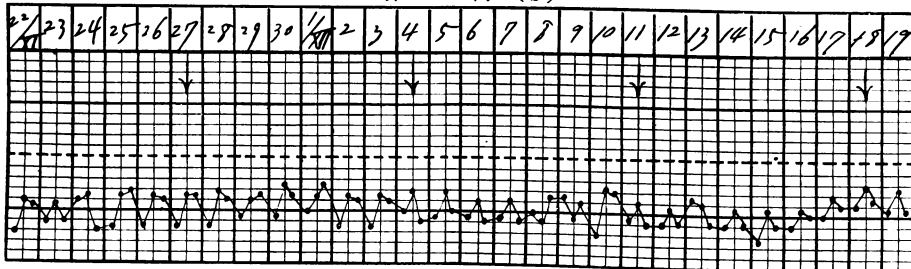
昭和 10 年

第 1 例 (b)



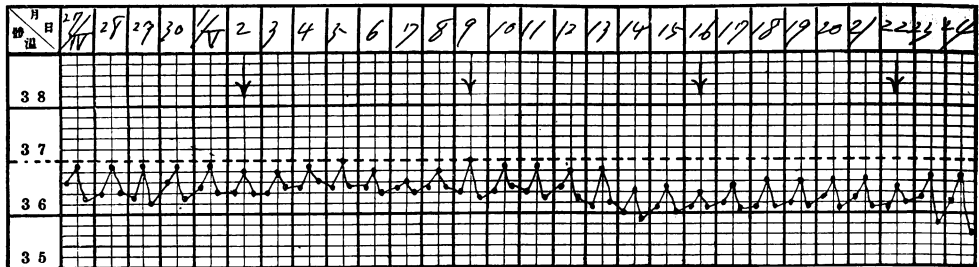
昭和 11 年

第 2 例 (b)



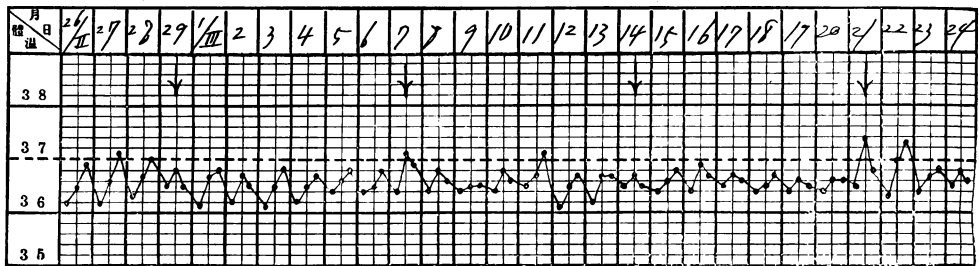
昭和 11 年

第 3 例 (a)



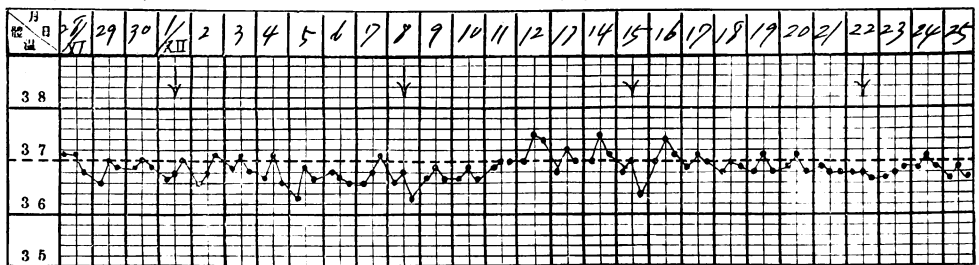
昭和 11 年

第 4 例 (a)



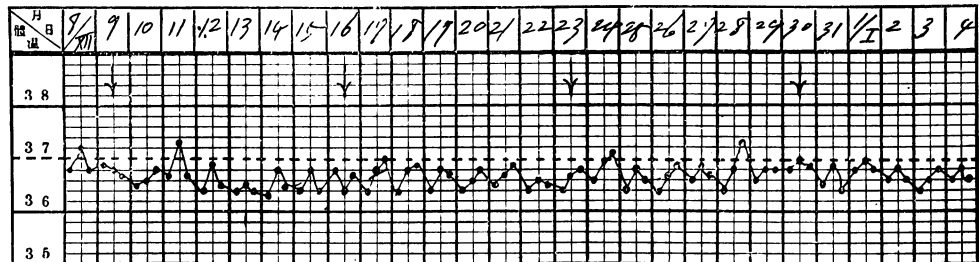
昭和 11 年

第 5 例 (a)



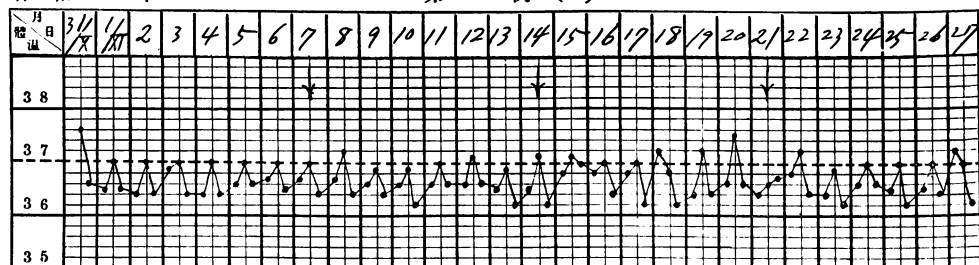
昭和 11 年

第 6 例 (a)



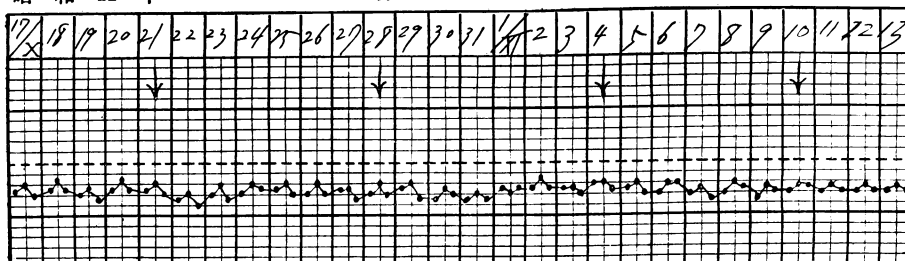
昭和 11 年

第 7 例 (a)



昭和 11 年

第 3 例 (b)



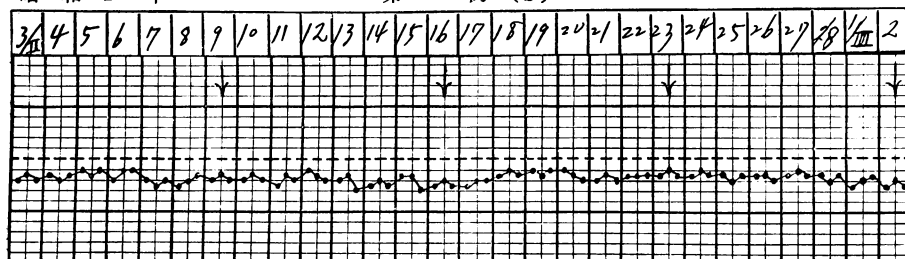
昭和 11 年

第 4 例 (b)



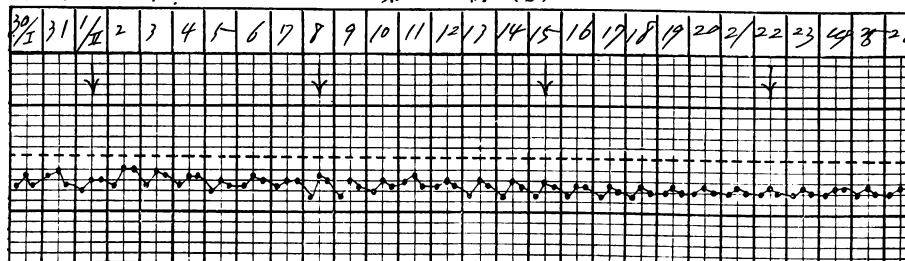
昭和 12 年

第 5 例 (b)



昭和 12 年

第 6 例 (b)



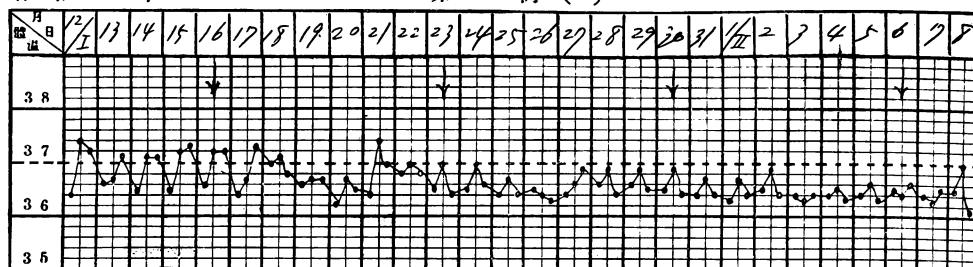
昭和 12 年

第 7 例 (b)



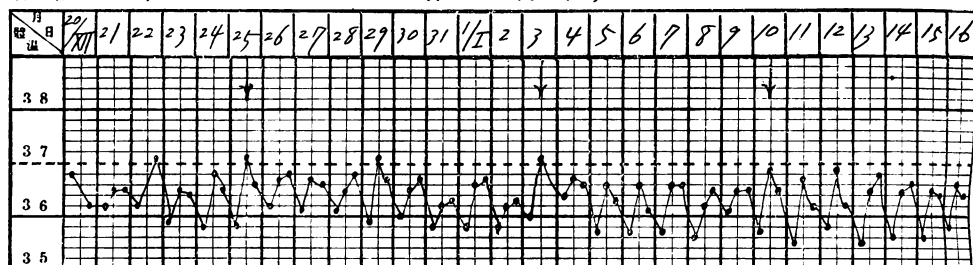
昭和7年

第8例(a)



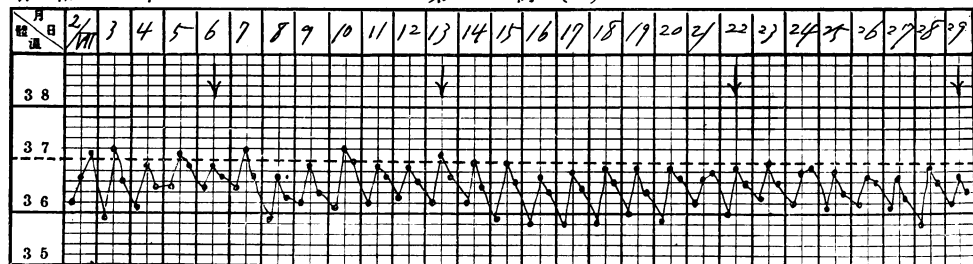
昭和8年

第9例(a)



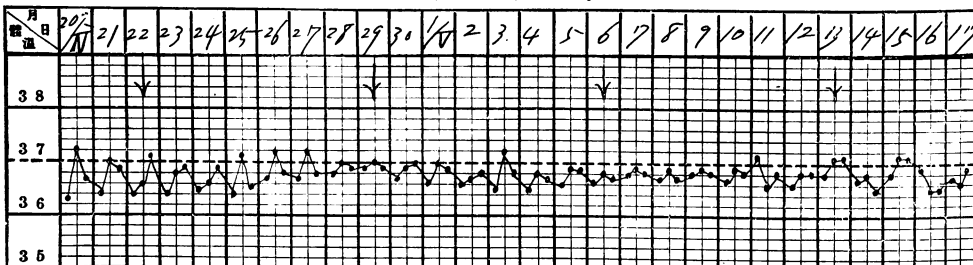
昭和7年

第10例(a)



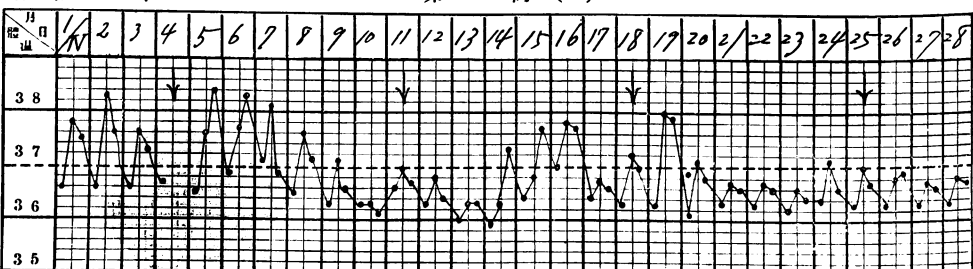
昭和7年

第11例(a)



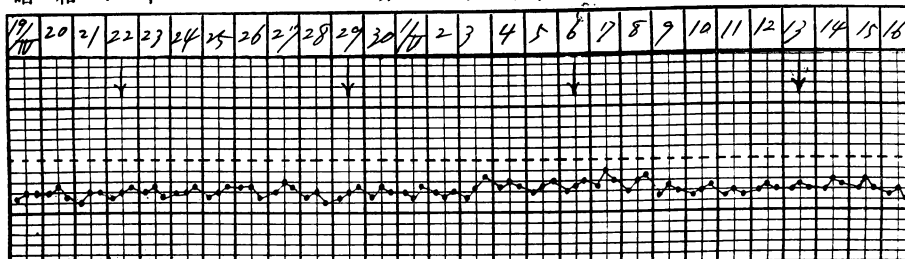
昭和11年

第12例(a)



昭和 7 年

第 8 例 (b)



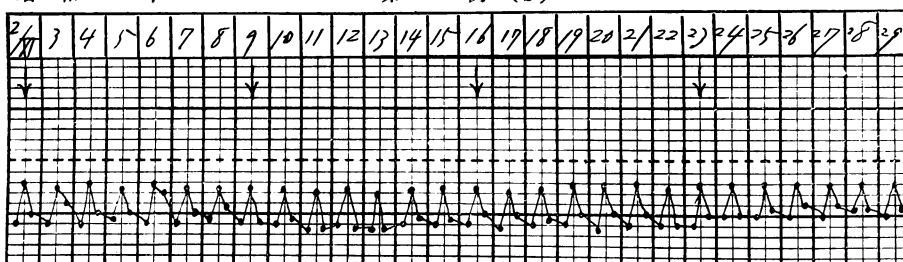
昭和 9 年

第 9 例 (b)



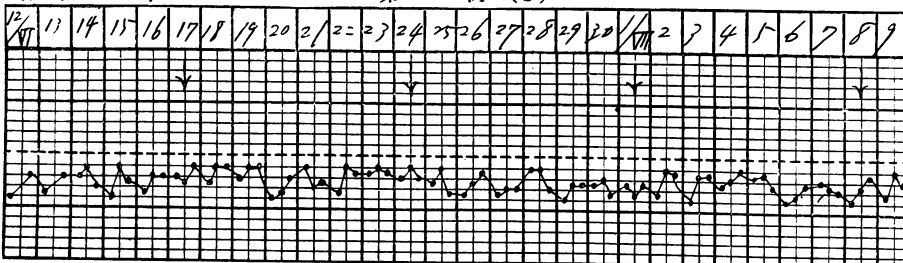
昭和 7 年

第 10 例 (b)



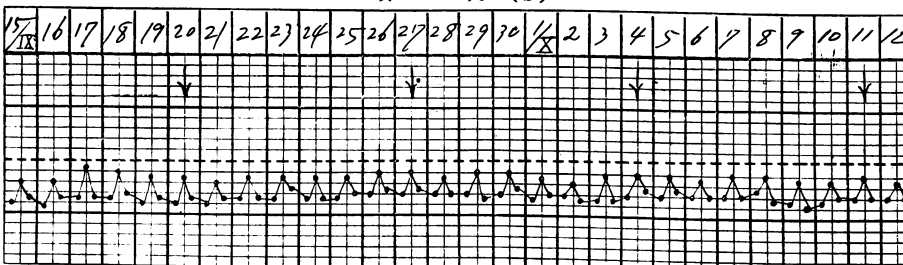
昭和 7 年

第 11 例 (b)



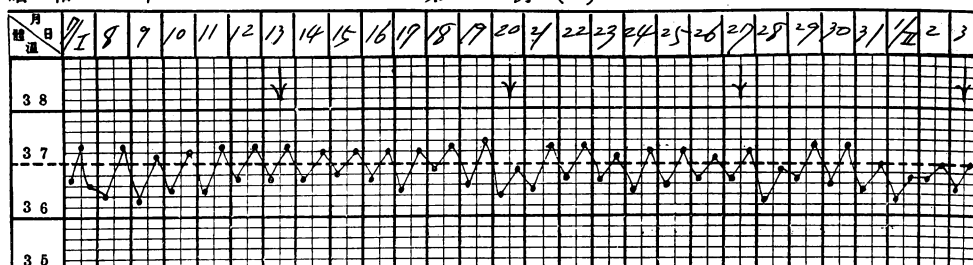
昭和 11 年

第 12 例 (b)



昭和 8 年

第 13 例 (a)



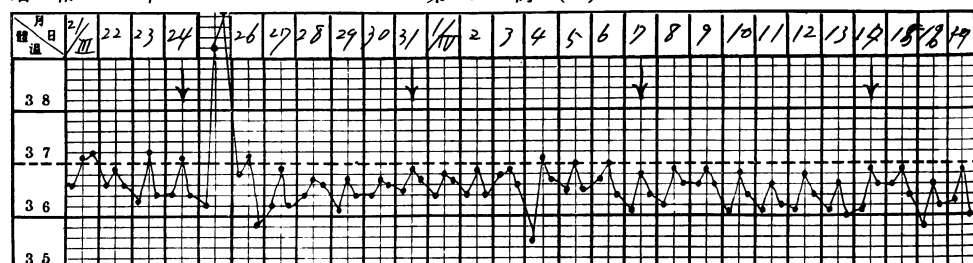
昭和 7 年

第 14 例 (a)



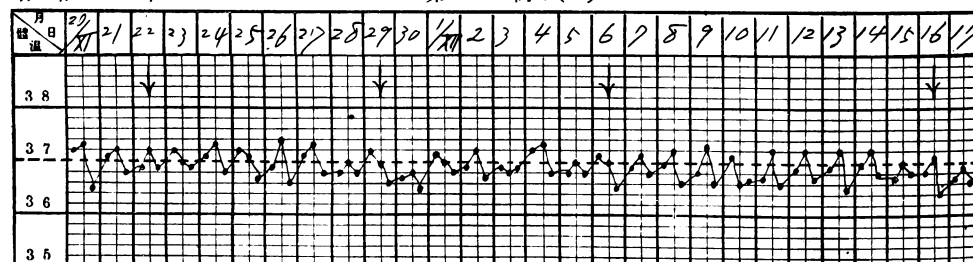
昭和 9 年

第 15 例 (a)



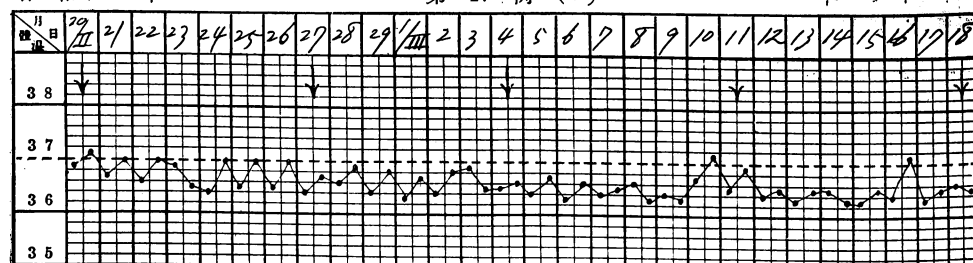
昭和 7 年

第 16 例 (a)



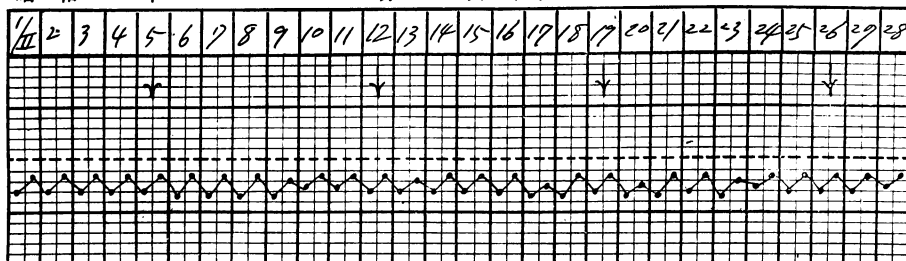
昭和 7 年

第 17 例 (a)



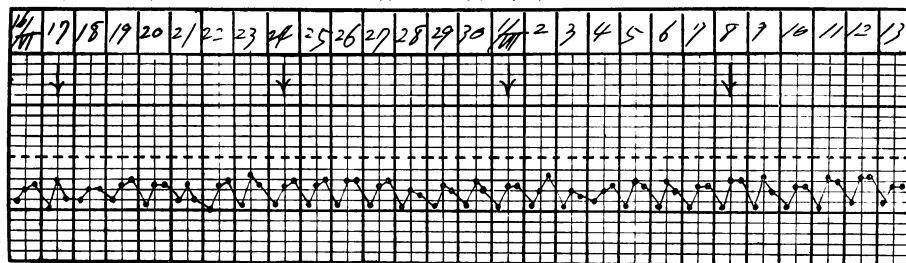
昭和 9 年

第 13 例 (b)



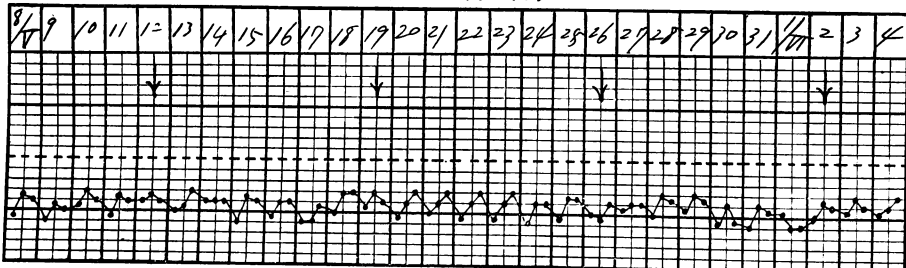
昭和 7 年

第 14 例 (b)



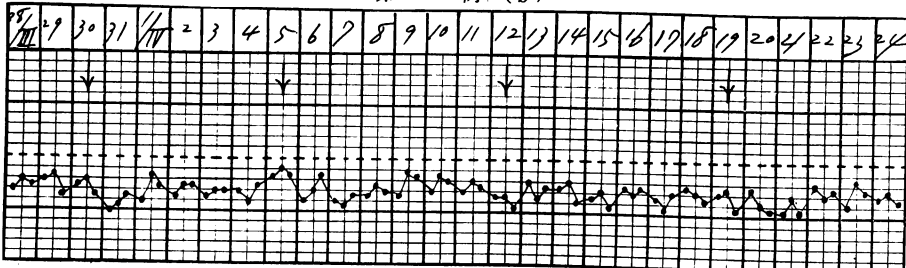
昭和 9 年

第 15 例 (b)



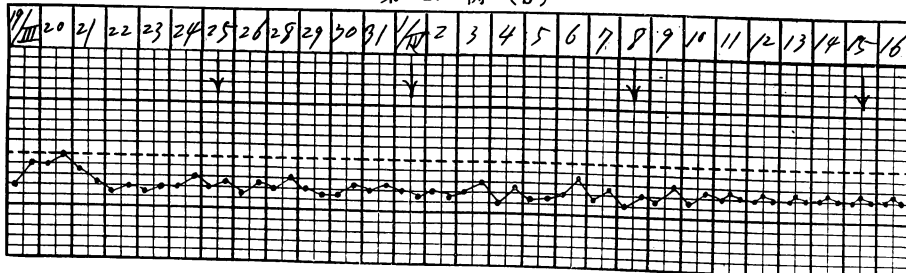
昭和 8 年

第 16 例 (b)



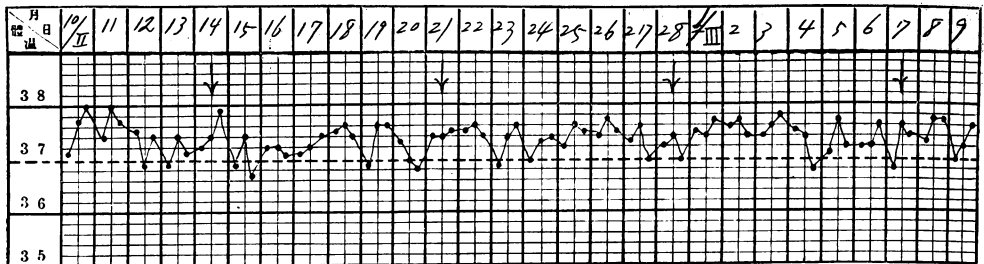
昭和 7 年

第 17 例 (b)



昭和8年

第18例(a)



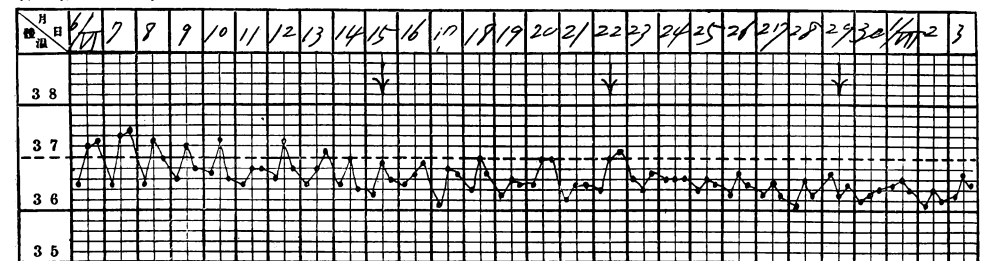
昭和10年

第19例(a)



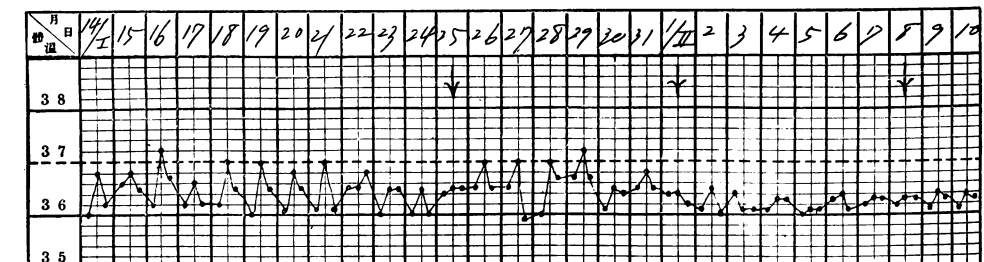
昭和11年

第20例(a)



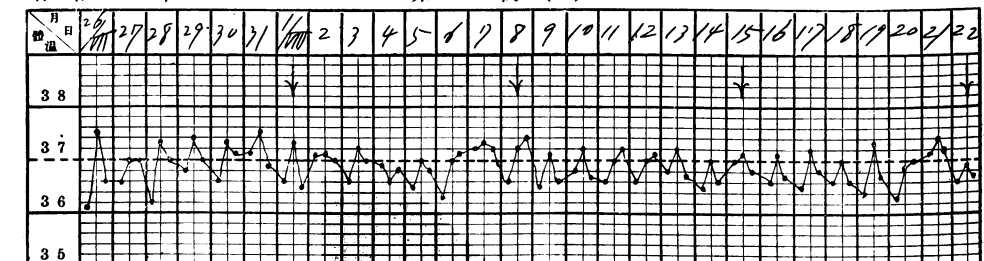
昭和7年

第21例(a)



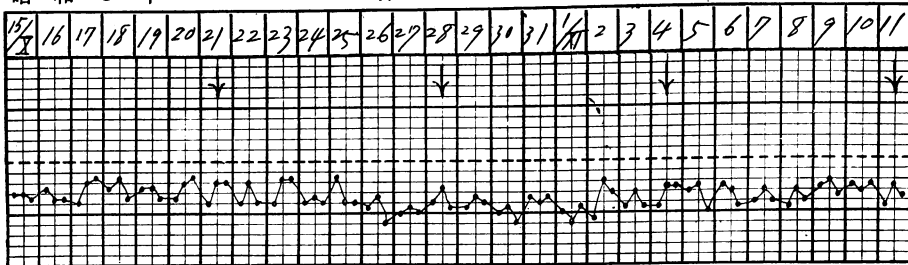
昭和11年

第22例(a)



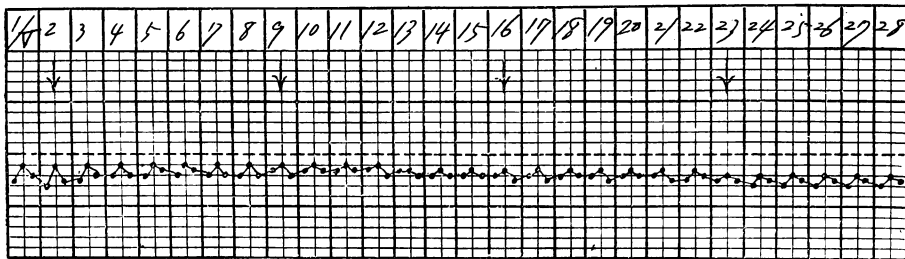
昭和 8 年

第 18 例 (b)



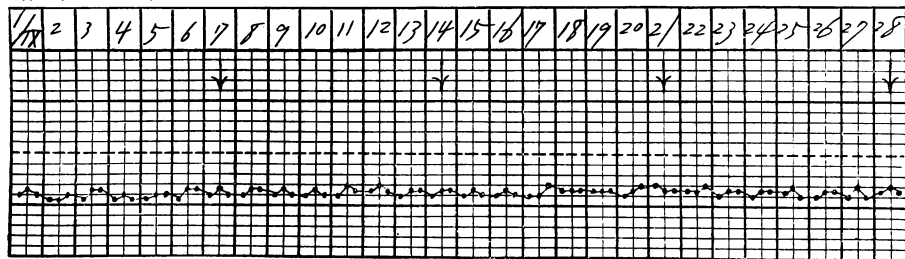
昭和 11 年

第 19 例 (b)



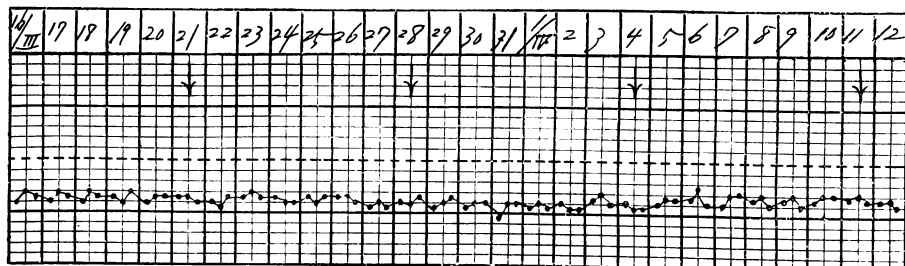
昭和 11 年

第 20 例 (b)



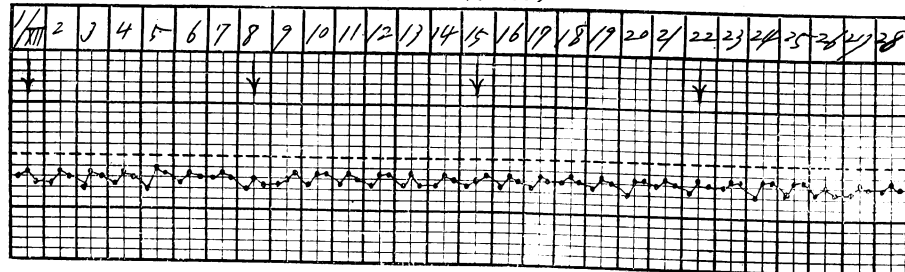
昭和 7 年

第 21 例 (b)



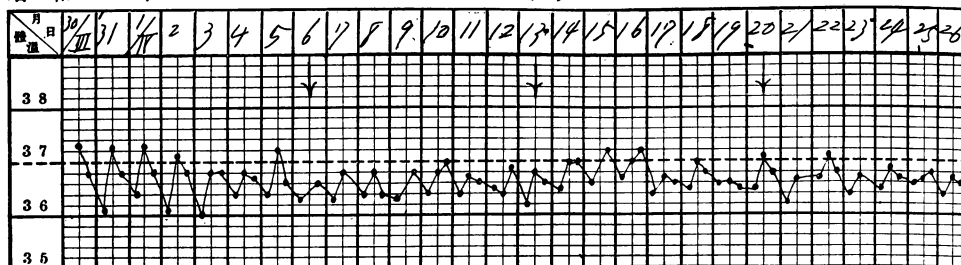
昭和 11 年

第 22 例 (b)



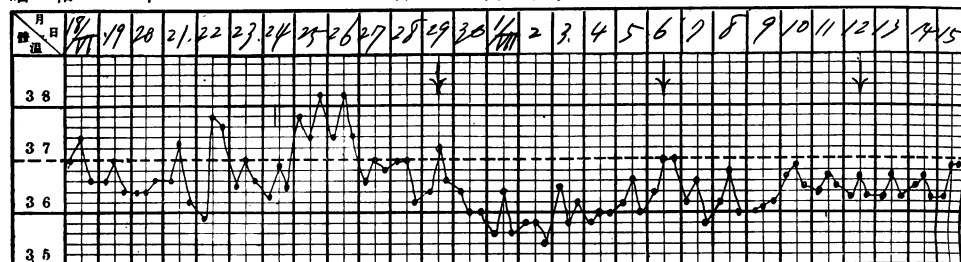
昭和 9 年

第 23 例 (a)



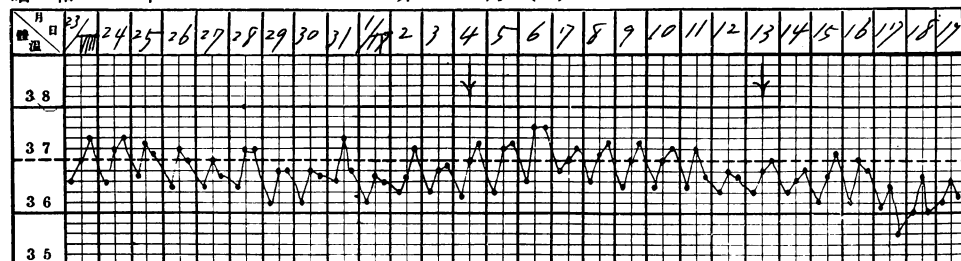
昭和 11 年

第 24 例 (a)



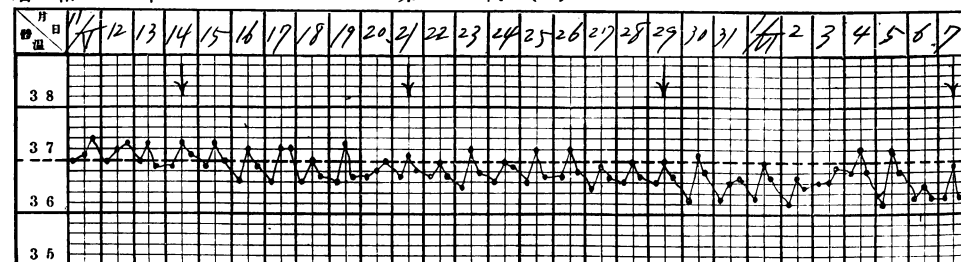
昭和 10 年

第 25 例 (a)



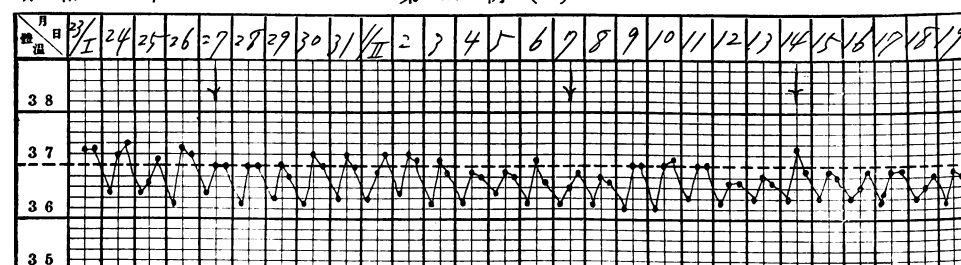
昭和 9 年

第 26 例 (a)



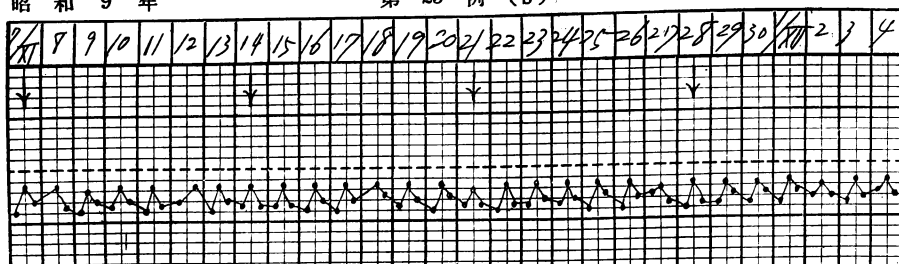
昭和 11 年

第 27 例 (a)



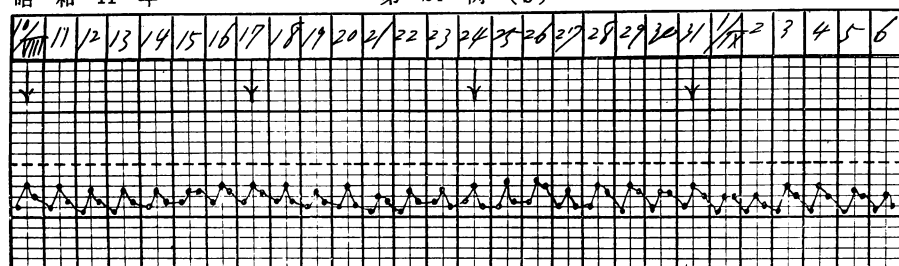
昭和 9 年

第 23 例 (b)



昭和 11 年

第 24 例 (b)



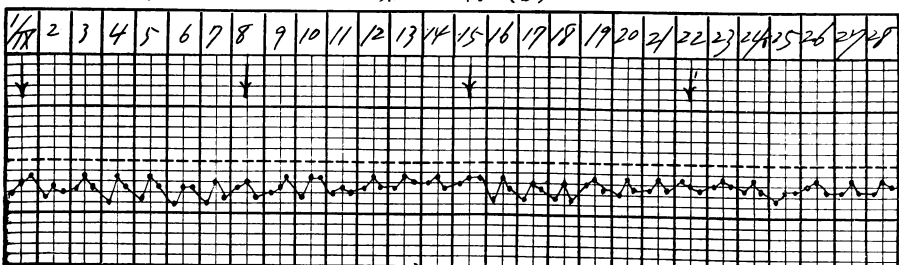
昭和 11 年

第 25 例 (b)



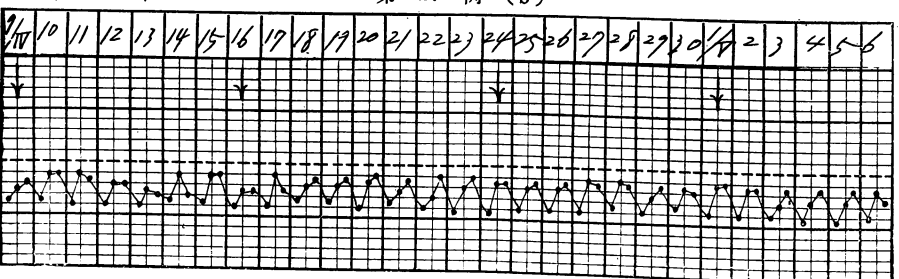
昭和 9 年

第 26 例 (b)



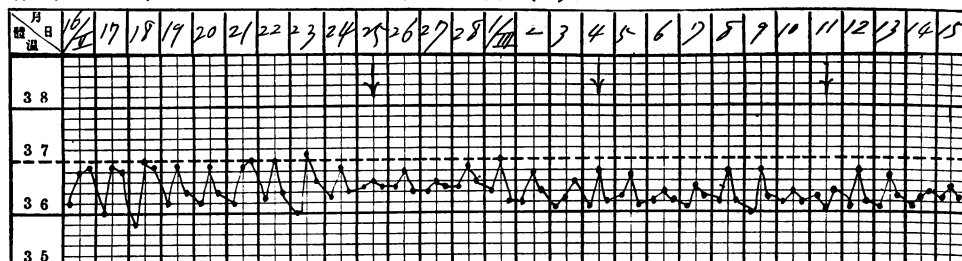
昭和 11 年

第 27 例 (b)



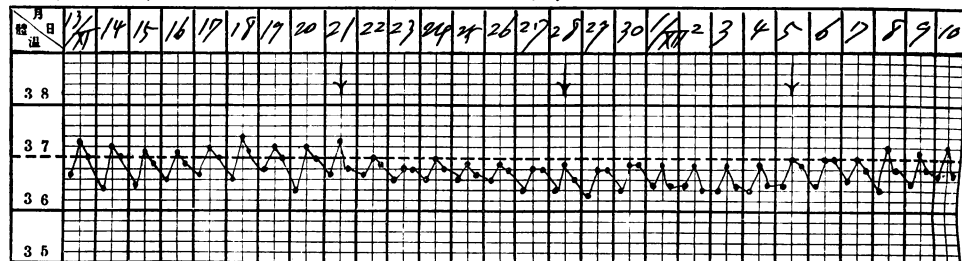
昭和 10 年

第 28 例 (a)



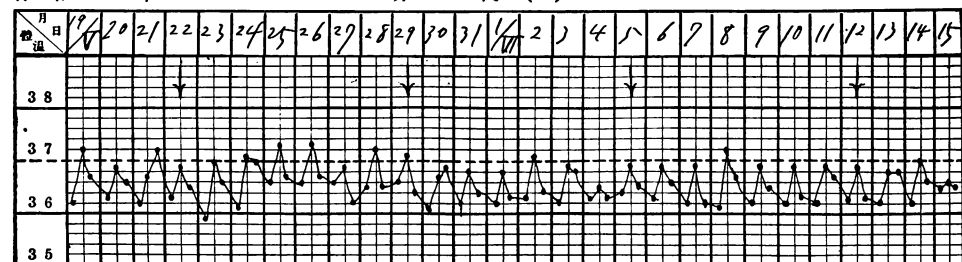
昭和 9 年

第 29 例 (a)



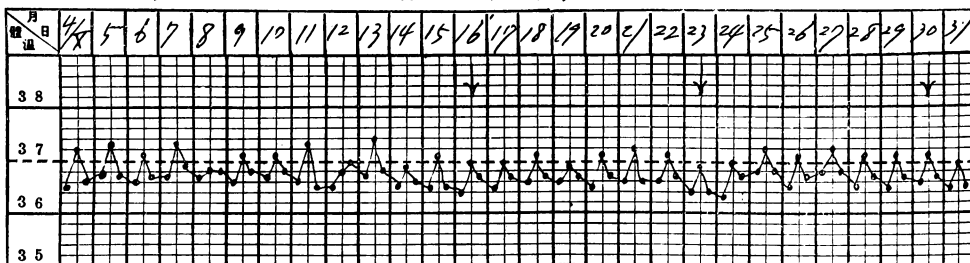
昭和 9 年

第 30 例 (a)



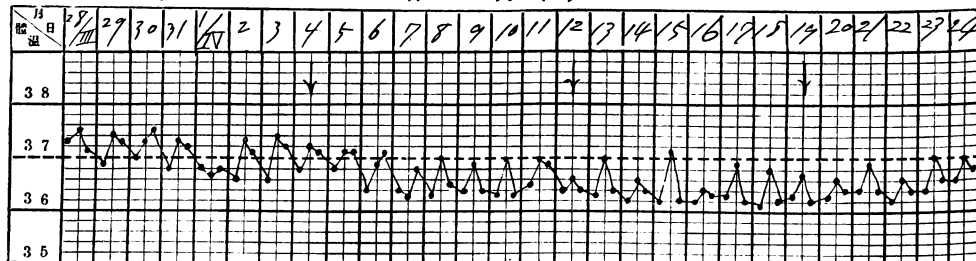
昭和 9 年

第 31 例 (a)

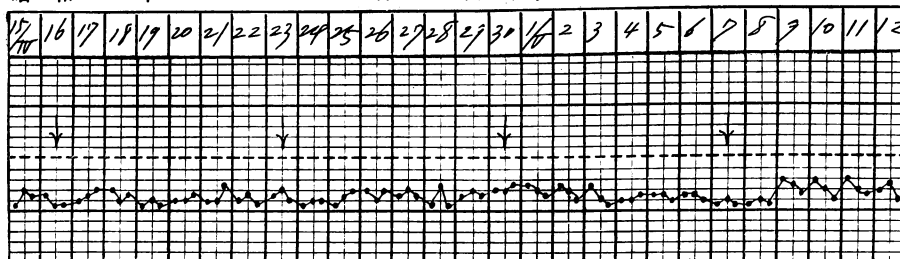


昭和 9 年

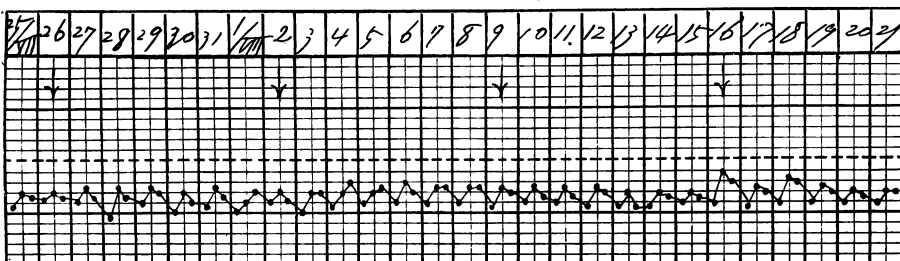
第 32 例 (a)



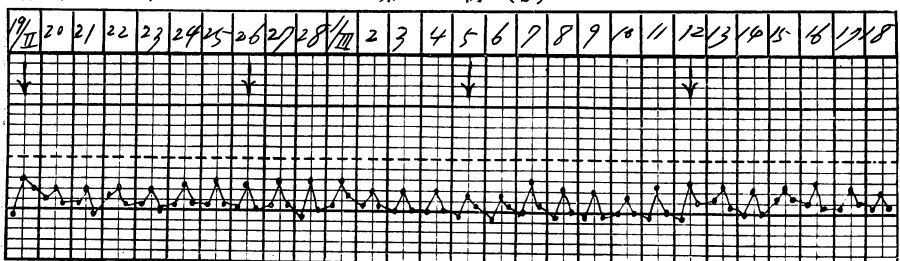
昭和 10 年 第 28 例 (b)



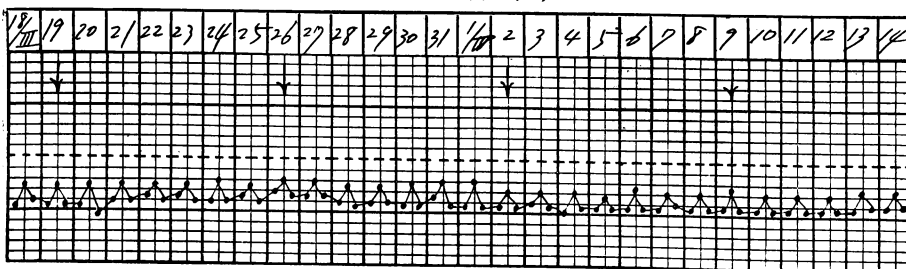
昭和 10 年 第 29 例 (b)



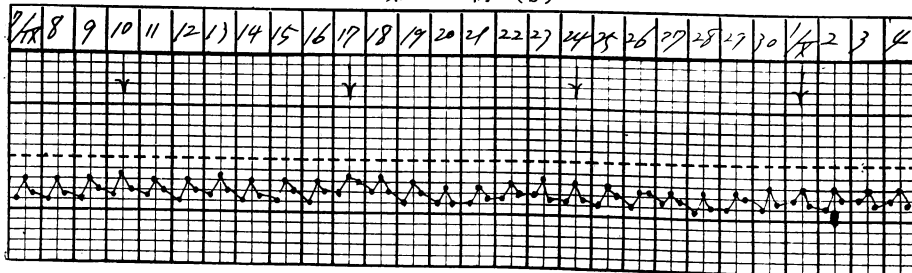
昭和 10 年 第 30 例 (b)



昭和 10 年 第 31 例 (b)

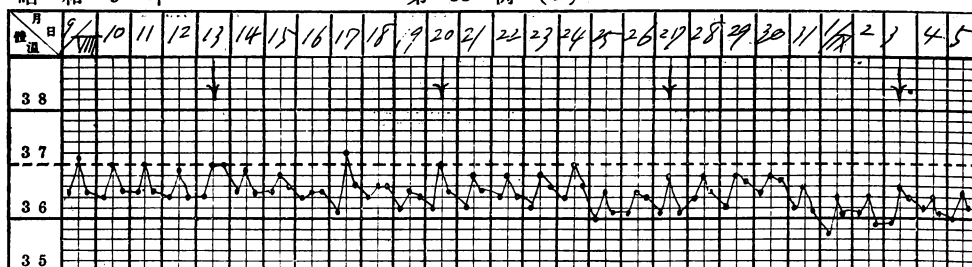


昭和 9 年 第 32 例 (b)



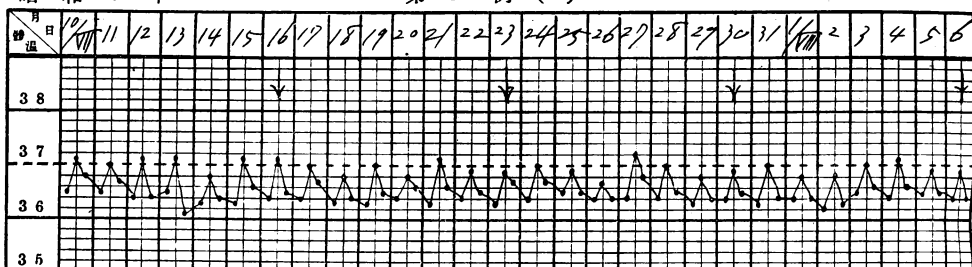
昭和 9 年

第 33 例 (a)



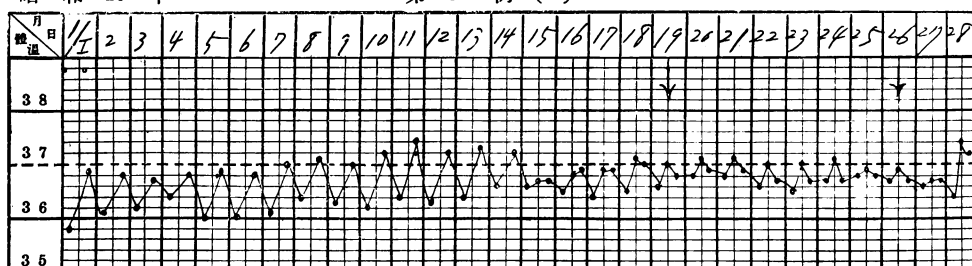
昭和 7 年

第 34 例 (a)



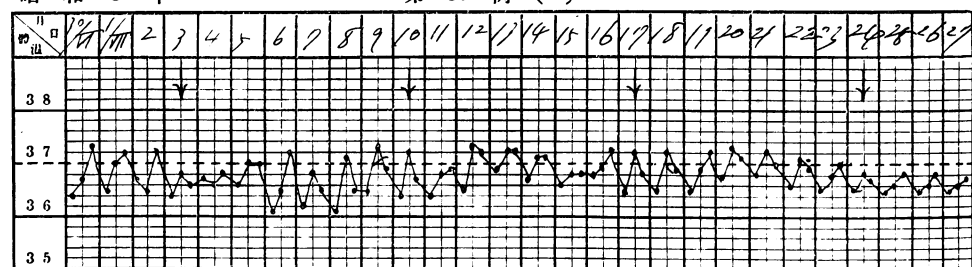
昭和 10 年

第 35 例 (a)



昭和 8 年

第 36 例 (a)



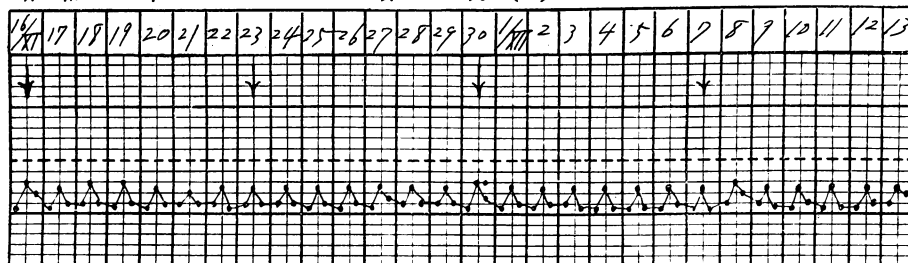
昭和 7 年

第 37 例 (a)



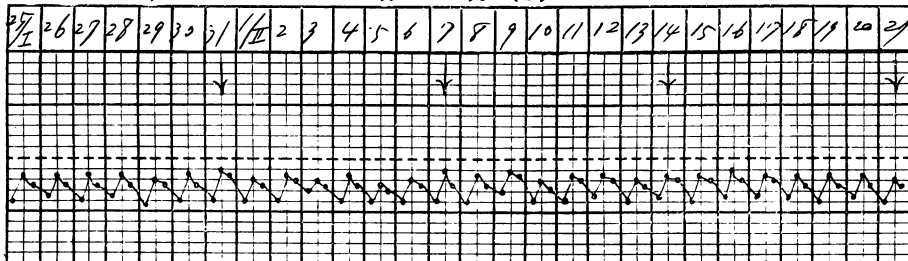
昭和 9 年

第 33 例 (b)



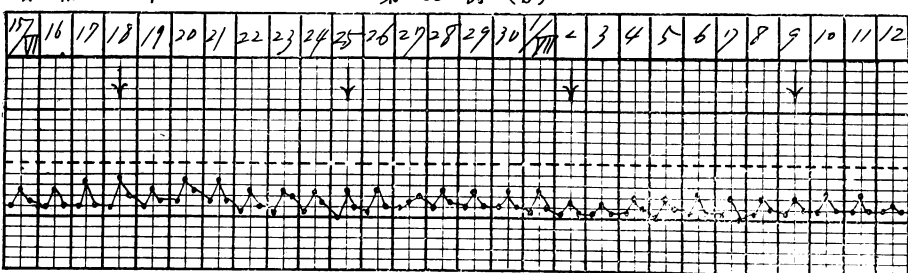
昭和 8 年

第 34 例 (b)



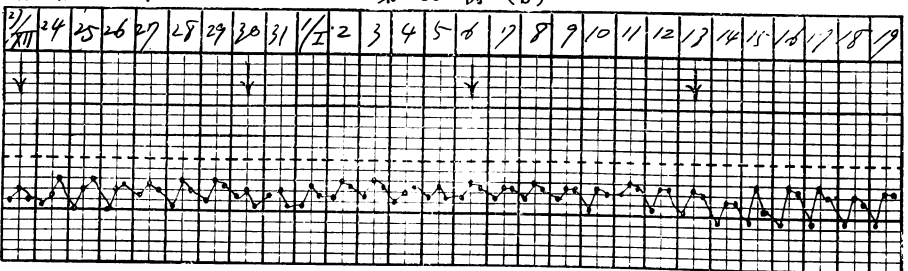
昭和 10 年

第 35 例 (b)



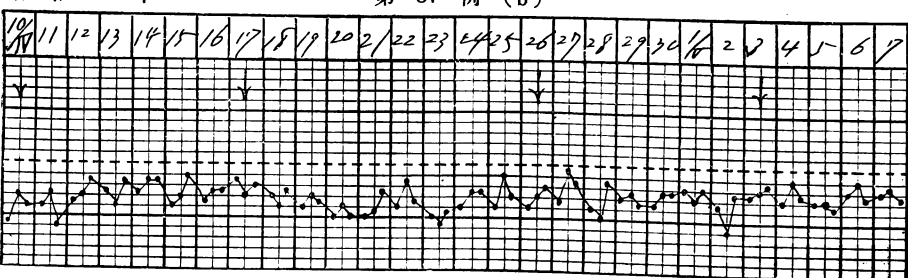
昭和 8 年

第 36 例 (b)



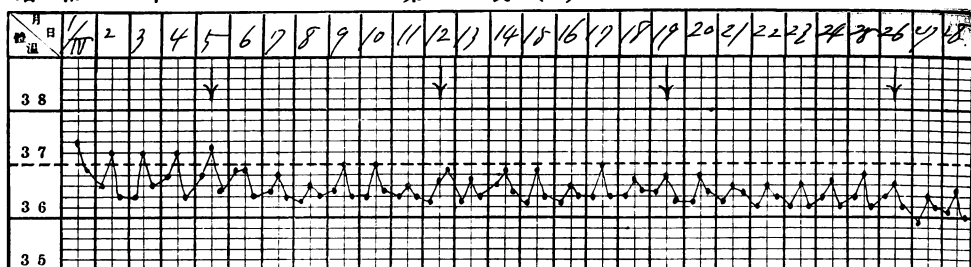
昭和 8 年

第 37 例 (b)



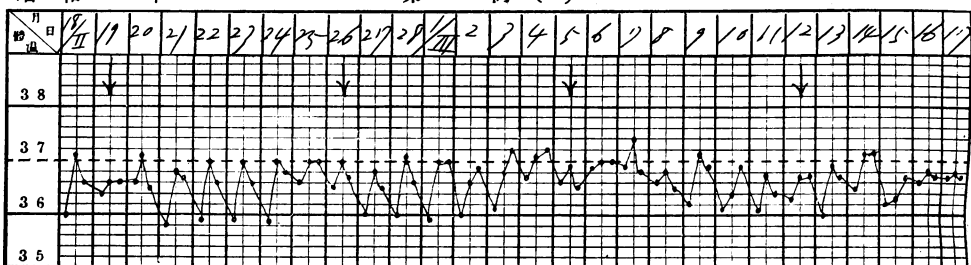
昭和 8 年

第 38 例 (a)



昭和 9 年

第 39 例 (a)



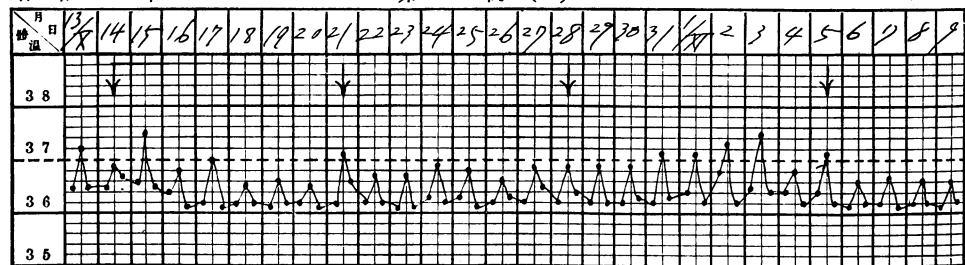
昭和 10 年

第 40 例 (a)



昭和 9 年

第 41 例 (a)



昭和 8 年

第 42 例 (a)



昭和 8 年

第 38 例 (b)



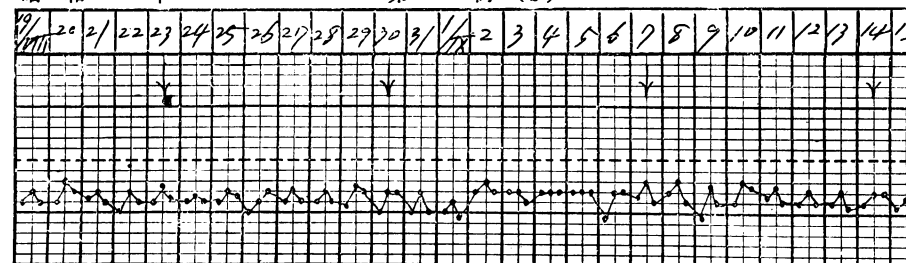
昭和 9 年

第 39 例 (b)



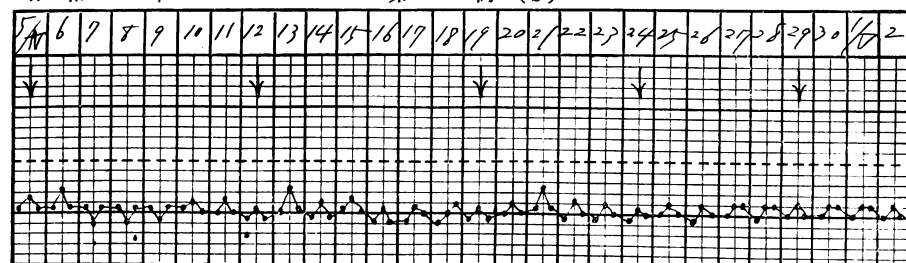
昭和 10 年

第 40 例 (b)



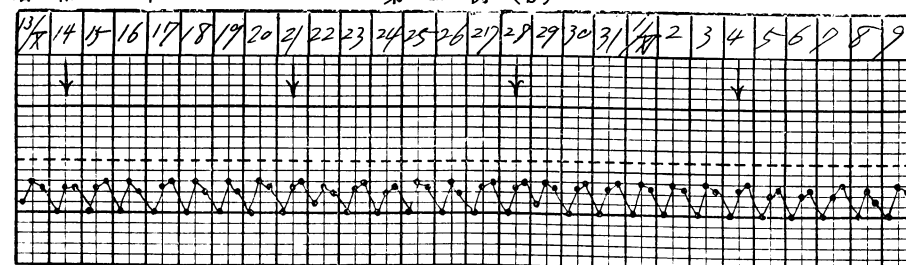
昭和 10 年

第 41 例 (b)

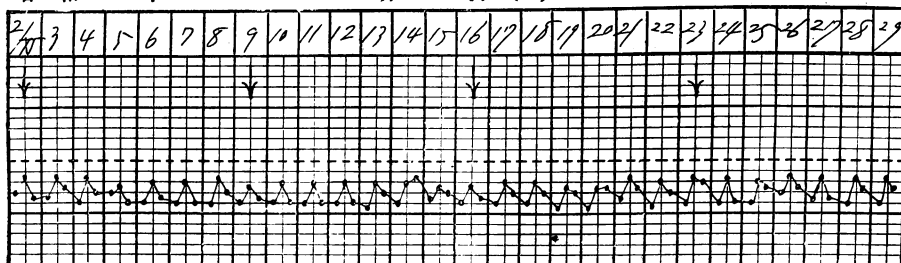


昭和 10 年

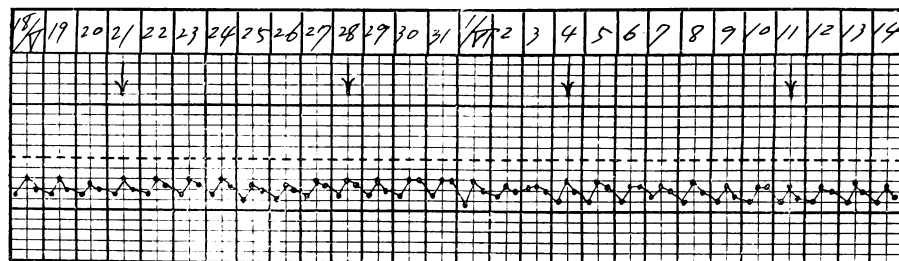
第 42 例 (b)



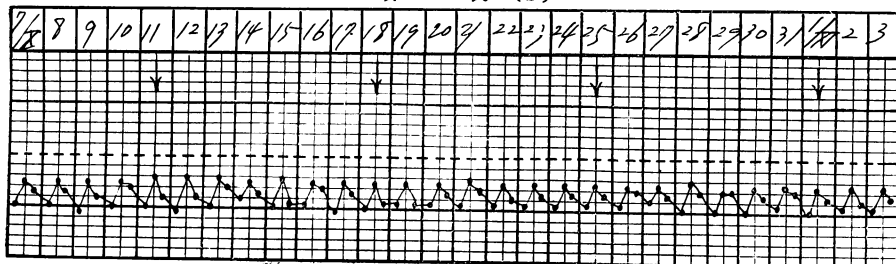
昭和 9 年 第 43 例 (b)



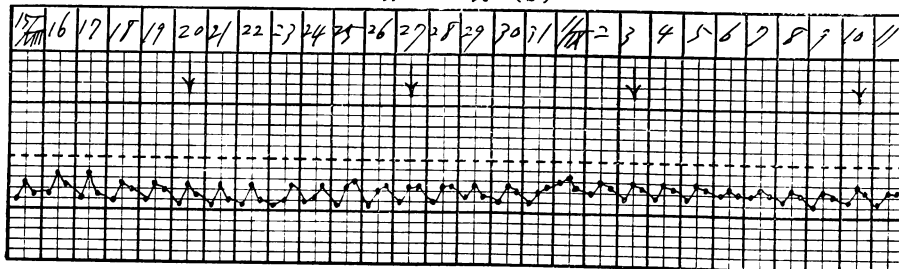
昭和 9 年 第 44 例 (b)



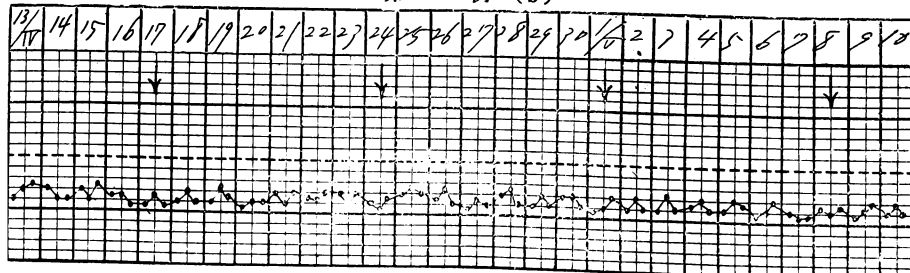
昭和 10 年 第 45 例 (b)



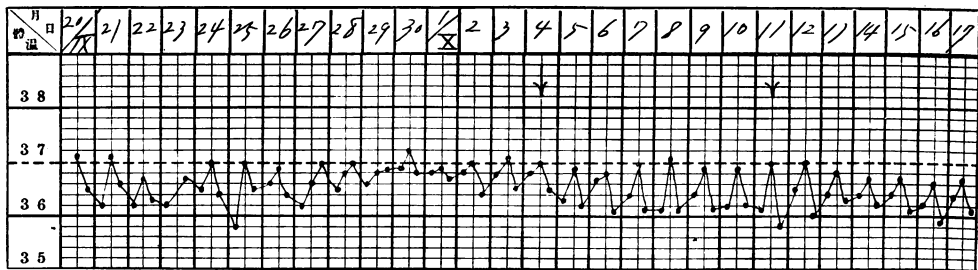
昭和 7 年 第 46 例 (b)



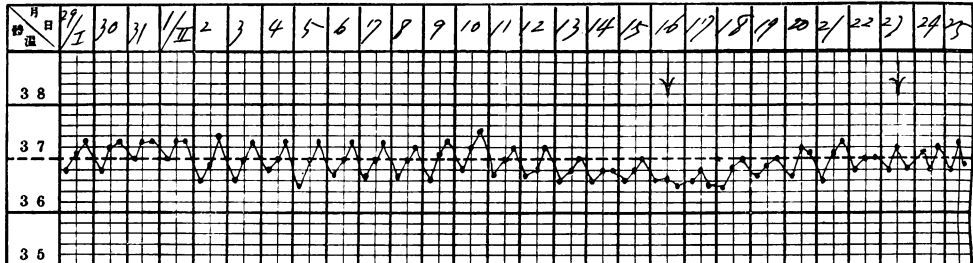
昭和 11 年 第 47 例 (b)



昭和 7 年 第 48 例 (a)



昭和 9 年 第 49 例 (a)



昭和 8 年 第 50 例 (a)



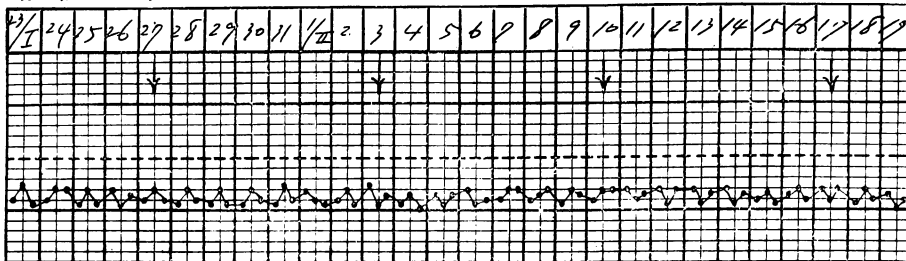
文 獻

(次ニ掲グルハ、スベテ額田及其共同研究者ノ業績ナリ)

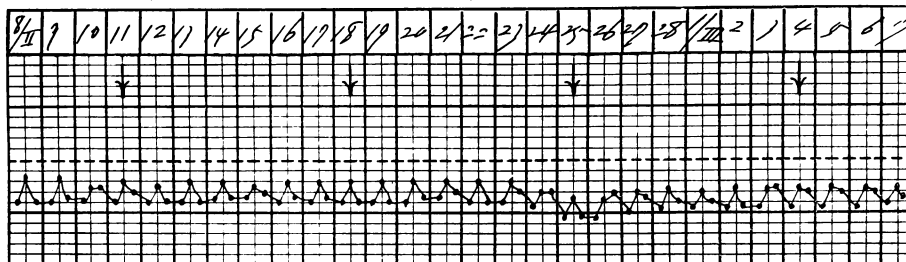
1) S. Nukada and T. Matsuzaki, Tissue Resistance and the Cause of Permanent Acquired Immunity, The Journal of Experimental Medicine, Vol. XL, No. 5, p. 661, 1924. 2) S. Nukada u. Y. Kako, Über die Schwankungen der Resistenz gegen Diphtherietoxin nach Immunisierung mit Heterobakterien, Klin. Wochenschr., No. 46, S. 2143, 1929. 3) S. Nukada u. Y. Kako, Über die Schwankungen der Resistenz gegen Pneumokokkeninfektion nach Immunisierung mit Heterobakterien, Zeitschr. f. Immunitätsf., Bd. 67, S. 83, 1930. 4) S. Nukada u. S. Arifuku, Über die Schwankungen der Resistenz gegen Typhusbazilleninfektion nach Immunisierung mit Heterobakterien, Zeitschr. f. Immunitätsf., Bd.

70, S. 1, 1931. 5) 吉井, 肺炎雙球菌ノ生體ノ致死的「チフス」菌傳染ニ對スル抵抗力増進作用ニ關スル研究追加, 東京醫事新誌, 第 2886 號(昭和 9 年). 6) S. Otsuki, Über die Schwankungen der Resistenz gegen Streptokokkeninfektion nach Immunisierung mit Heterobakterien, Zeitschr. f. Immunitätsf., Bd. 74, S. 249, 1932. 7) S. Nukada u. K. Fujii, Über Schwankungen der Resistenz gegen Colibazilleninfektion nach Immunisierung mit Heterobakterien, Zeitschr. f. Immunitätsf., Bd. 79, S. 287, 1933. 8) S. Nukada und M. Okutani, Über Schwankungen der Resistenz gegen Shiga-Dysenteriebazilleninfektion nach Immunisierung mit Heterobakterien, Zeitschr. f. Immunitätsf., Bd. 86, S. 204, 1935. 9) S. Nukada

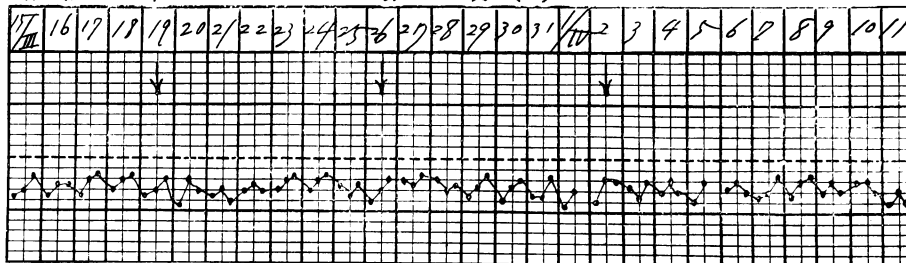
昭和 8 年 第 例 (b)



昭和 10 年 第 49 例 (b)



昭和 9 年 第 50 例 (b)



u. M. Okutani, Über Schwankungen der Resistenz gegen Paratyphusbazillen-B-Infektion nach Immunisierung mit Heterobakterien, Zeitschr. f. Immunitätsf. Bd. 90, S. 338, 1937. 10) S. Nukada u. C. Ryu, Über Schwankungen der Resistenz gegen tödliche hämatogene Tuberkelbazilleninfektion nach Immunisierung mit Heterobakterien, Zeitschr. f. Immunitätsf., Bd. 88, S. 496, 1936. 11) 龍, 異種細菌免疫後ニ於ケル正常凝集價ノ動搖ニ就テ, 東京醫學會雜誌, 第 47 卷, 第 5 號(昭和 8 年). 12) S. Nukada u. S. Arifuku, Experimentelle Untersuchungen über die Einflüsse minimaler Menge von Heterobakterien auf das Fieber durch Typhusbazillen, Arch. f. exper. Path. u. Pharm., Bd. 163, S. 700, 1932. 13) S. Nukada u. S. Otsuki, Experimentelle Untersuchungen über die Einflüsse minimaler Menge von Heterobakterien auf das Fieber durch Pneumokokken, Arch. f. exper. Path. u. Pharm., Bd. 166, S. 290, 1932. 14) S. Nukada u. S. Otsuki, Experi-

mentelle Untersuchungen über die Einflüsse einer minimalen Menge von Heterobakterien auf das Fieber durch Streptokokken, Arch. f. exper. Path. u. Pharm., Bd. 170, S. 8, 1933. 15) S. Nukada u. S. Otsuki, Experimentelle Untersuchungen über die Einflüsse einer minimalen Menge von Heterobakterien auf das Fieber durch Colibazillen, Arch. f. exper. Path. u. Pharm., Bd. 179, S. 164, 1935. 16) 奥谷, 赤痢(志賀)菌ニヨル發熱ニ對スル微量ノ異種細菌ノ影響ニ關スル實驗的研究, 東京醫學會誌, 第 51 卷, 第 8 號(昭和 12 年). 17) 奥谷, 「パラチフス」菌 B-ヨル發熱ニ對スル微量ノ異種細菌ノ影響ニ關スル實驗的研究, 同上. 18) S. Nukada u. T. Yoshii, Experimentelle Untersuchungen über die Einflüsse minimaler Mengen von Heterobakterien auf das Fieber durch Influenzabazillen, Arch. f. exper. Path. u. Pharm., Bd. 185, S. 178, 1937. 19) 吉井, 百日咳菌ニヨル發熱ニ對スル微量ノ各種異種細菌ノ影響ニ關スル實驗的研究, 東京醫學會雜誌, 第 50 卷, 第 1

號(昭和11年). 20) 吉井, 淋菌ニヨル發熱ニ對スル微量ノ各種異種細菌ノ影響ニ關スル實驗的研究, 東京醫學會雜誌, 第51卷, 第5號(昭和12年). 21) 龍, 實齋の血行性結核ノ經過ニ及ボス微量ノ異種細菌ノ影響ニ就テ, 東京醫學會雜誌, 第50卷,

第7號(昭和11年). 22) S. Nukada u. C. Ryu, Über die Einflüsse minimaler Mengen von Heterobakterien auf den Verlauf der experimentellen hämatogenen Tuberkulose, Beiträge zur Klinik der Tuberkulose, Bd. 89, S. 449, 1937.